三の雲

三

哥を名とせり

[v.5]

PL788
.4
.G4
1654
vol.5
copy1
Asian
Japan
cage

THE LIBRARY OF CONGRESS

2004551302

源氏十七夕

わらはやうまわづらひ給てよろ川にまぎなひ給ぢ
などまいらせ給へどもしるしなくてあまたゝ給ひ
とこりのひかれば人ある人きゝ山になんちまがし
でらといふ所(ところ)にかしこきをこなひ人侍(えづ)こぞの夜(あつ)
もらるをこりて人ごまじなひまづらひしをやゝ
てとゞむらんづひ給まゝ給さしてこゝろしつゝ時(とき)く
うたて給ふ給とくこそ心(こころ)きせ給(なま)ためなど四方
れば(源)めしにはかくしらるに聖おいかぐまりてむろの
とまもまゐでずとやこれば源詞いかぐもをんしのび
てもれをんとのまて君ともにむつましこき四
五人ばかりしてまゐ暁(あかつき)におり寸やゝかういる前

なりそり三月のつごもりなれば京の笠ざうり
そこれ過よそり山のさくらはまぶさうりまでいり
もておそすゝまくに霞のこゝずまひもおかしう
こゆれどうらなりさ海もなるひ給ひず取をされ
方までめづらしうおぼされなり鳥のさ海もいと
あそれなりこれこそくゝあきの岩のなりまぞひ
じ里いりぬそりけり

のぼりまて誰とも志しせ給はずいといふう
やつれまへれど志るさ此さ後なれバあかうし
こや一日めし給しまやおかしますらんいまは
これ世のことは思ひまへねバげんがこのたこなひ
もすてますれて給るをいかでかうおかしまし
つゝんとおどろきさはざうち思ふつゝこそまま
つゝいとこうときだいとこなりそりさるべきもの
此くりてぞかせこそまつるかぢなどまいる程日
こくさしあぐりぬすうし立出つゝこわうしまへ
だこうき前まてこうしこ僧坊どもあらはまこ
おろさるゝこぐ此はぐらありの志もまおなじこし

ぞなれどうちしうしわくしてさよぎなるやら
うなどつゞけてこゝろちいとよしあるハなまゝ人の守
むまゝとこひぬへバ此とも なる人これなんなる
がし僧都のこのかゝとせこもり侍る坊ましんべな
なるこころもげかしき人もむなる所まこそあるれ
あやしうもあまりやいしけるれ さてもこそ
もれなどのぬふさうげなるわらハなどあまた出
きてあらそまつり並おりなどするもあらハな
ミ種がしこる女こそ有れ僧都ハよもさやうにハ
すへ給りじをいかなる人なるんとくらぐいふおり
てのぞくもありおかしげるる女ごども わかき

人ならぬへみやこにゆかんといふ思ひはさらにし給
ひつ日たちまてはいかなんとおほしけるを。
とうちものさはりさせめておもほしわすれぬなんく
待りところところにゆ秋ばうしろの山にちかうて京の
うちそのふくるまゝにすまへりて宮すの梢そこ
なくさみかたけれは程なく思ひはいとゝまさる
かなれは哀なりけるすむ人の心はおもひのこすともな
あはれとのまへにこれといとあさく侍り。
人のそまたにまた待つそ山の端たなひくをかなん
をさせて侍はかりなほ思ひいうしうものうき世給
さん。あさまの山。なほまたけふりのたえさりけるに

ゆかもありぬるよしのくるまれおもしろきこゝろく
いそのうへをいひつゞくるもありて、よろづまま
ざらりしきる也、ちりきあまはちりまれあし
の海こそなすべことゝ侍れ、なまのいたりゆるきく
まはなされどこゝ海のおもてをとゝわたしこる程ど
なんあやしくこと前なくず、ゆ目びかなる前は
侍かれくるまれさ紀のうこ、志ばちれ其ともあり
づきるいへいといたりし、犬臣の後にて、おこち
もすべからけ人の世のひがもれにて、まじらひ
もき須、を清の中将をすてゝ給ひけりけり
つきなれどかれ玉の人にもすてしけなづられて、

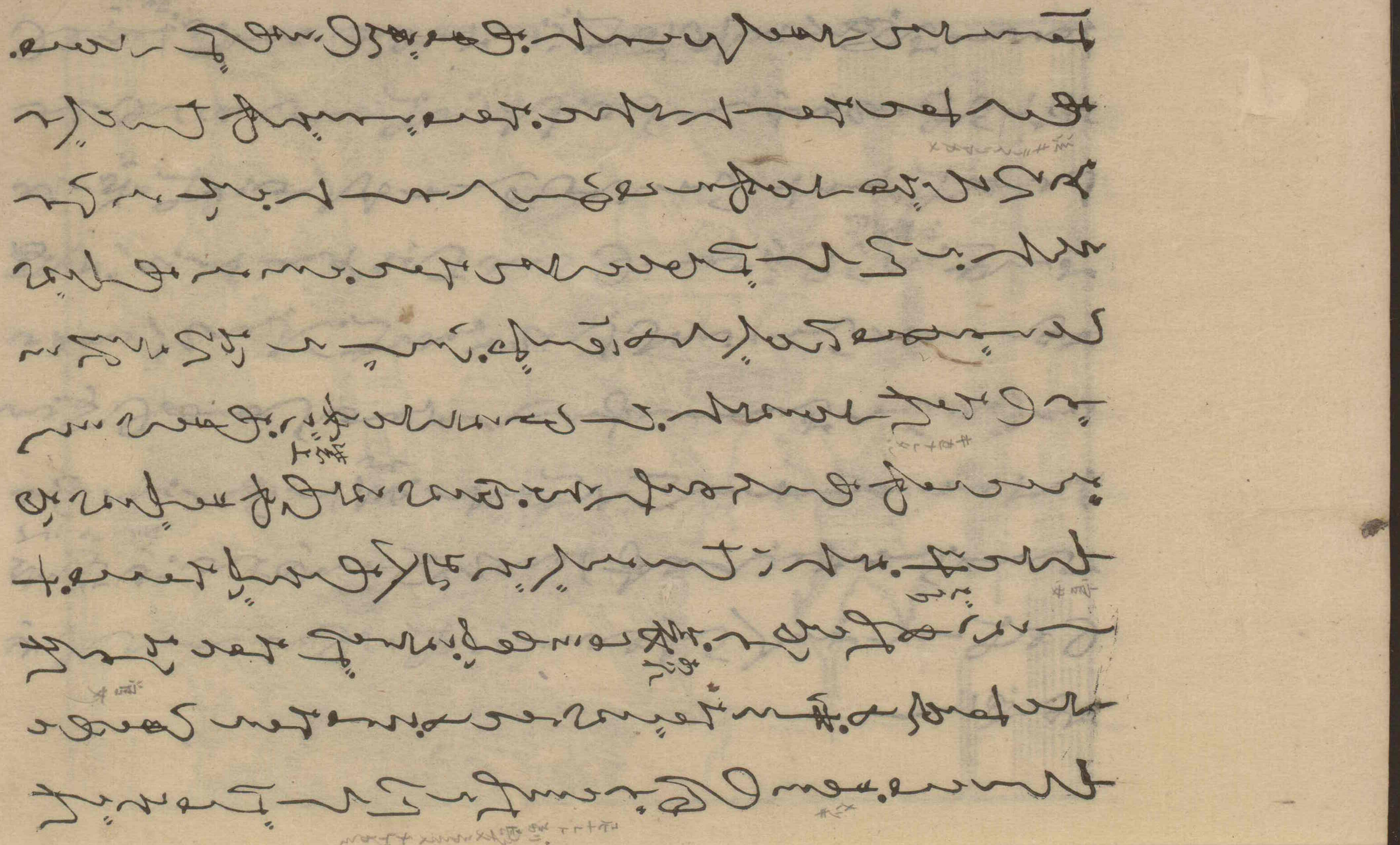
なまのめいぼくまで、文都(三室)まもりへんといひて、
りしらもおろし侍まけるをすうしおくまりしろ
山ずみもをで、さる海(うこ)づくまいぞねこる、ひがくしき
やうなれど、げまかれくまのうちまさも人のまり
ねめべき所こもなりなぐら、ゆうきさとりひかく
ぞなれ心すぐく、わるきさいしのさひまびぬべきま
よりかけ心をやわるすまねまなん侍る、さいけ
ころまりろぐりて侍しついでまなりさ海こゐへ
まよりて侍しかば、京までこそ取しぬやう女なれ、
そこしもるまいかめしうしめてつくれるさ海、さ
はいへどくりのはかきまで、しをきけること

されば、をりのまことひゆゑるまかべき、心がまへもまま
なすくさうりさう、後のつみはともいてしようて。
半くほうしまうしける人はみなかへりける
とりをば、さてそれむもあことさひのなかの、おし
うゐあしぐばうてち心がせなど御なかり、ざくのくるの
はりさなどよういしままてそ、さう心だ人ころなれ
どさくるうけひりず、我身のくいつづましけ
めのぶるあるば、これ人ひとりにしそあれ、せうそこ
またらり、我はをくれてそれこころざしとげず。
これせひをきつくすくせうげずうるはいりねと
つゐるゆひごんしまきて御らなど守ゆ我ば

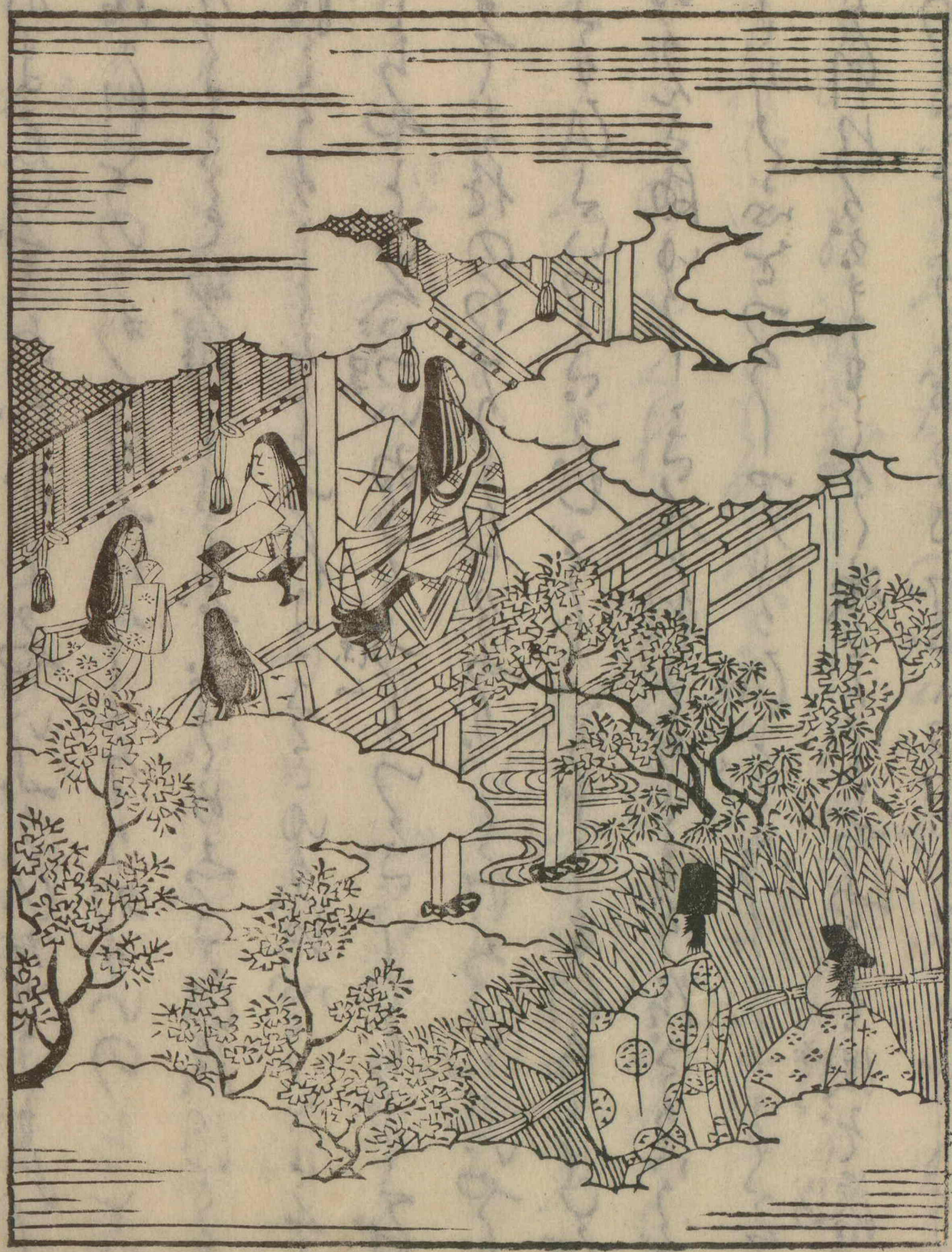
もおしとゝさゝかふ人ぞかいつまうわうのさゝさゝ
まなるべきいほさむすめなるゝ心ゝうさくるしや
とてわらぬくいふはとりまれりこのこれそう人
よりこしとうかりえゝうなりなりいとすさゝう
ものなれバかれ入聞のゆいごんやぶりつべき心は
あらんしさてたゝずこゝうなるんといひあり
いぞやさいふともおなるびこゝんおさるくよりさう
あるおひいぞふりめいゝうおやまのこゝしるがひ
こゝんはけくとそゆへあるべかれようさわうど
わらはなど都のやんごとなきところくよりは
いまふれてるゝぞ口とりて。まばゆくとそもてる寸

それなきけなきさ人まなりてゆゑさて心やすく
てしもえをきたらじをやなどいてもあり。源詞 君ハな
ま心ゆりて海のそこまでふかしせひいるらん。そこの
みるめも抱むつしうなどの給て。こゝなすぎかも
はしたりかやうまでもなべてなすぎまでひかた
たるこゝ。これこゝまふ。これこゝろなれば。これみくとゞまらし
んやとこゝてまつる。くれかたりぬれど。をこゝせ
ものすぎなりぬるまこそハあれ。もやうへしせ給
なんとある後ぞいとこれものけなどくるくれる
さ海まおいしましけるを。こゝまひハなる後ゑ川りる
うぢなどまいりて。いでさせまへと申す。さもあるか

こゝろなき人はすゞみもうち捨(すて)まゐらせひ給は
ねざさもすゞみおりしもそさらは暁(あかつき)まどのおもて白も
いとなかなまつれ〴〵なれば夕暮(ぐれ)のいつとうらみすこ
さらるまのされるうみよしゞざきのまよひ立出(たちいで)
おもふ人ではなへしのそでこれこいぢうられとなる
こるのぞさゝきまへだでこみましおもそでおしも
おぼけさへそもりてきこちふあまなかりすゞ
れすうしあぞでられそそまつめり中のはしらま
よりゐそけうそくのへは理(きやう)をきそいとなや
ましげまよるねあまぶんへとまず宮十ば
みつそびとまつくおそまやをされどうつさ



すてしおぼしたる事なれば、ここなるめりと語、すぐめの
子をいぬきがおがしつる。ふせごれうちまこめたり
つるもれをとそていとくちおしとしへり。これ居たる
おとれ、迷いの心なしのかたわざをして、さいる夜
ゐてそていとうろづさなれ、いづるへかまか
まぬ。いとおしうやうしくなりつるものゆゑ
すなどもとそこれとて、立てゆくゆゑ
らうまいとなづくめやすきひとなめり。小納言
のめれとくぞ人いふめりとこれこのうしろみか
ゐ色し



あまぶいであるおさるや・いふかひなうもれし
給れ・をのがかくふ・ふなすまなりぬるいのちをば
なまともおぼしたしで・すぐめしたひ給ほどよ
はこうつことぞとつねまさこゆる後・心うくとて
こちやといへば・づいぬたり・つらつきいとらうたげ
まで・ぞ程のわたりうちふ・いまけるくかいやり
たりひさいつさ・うむざしいうじうまけくしまび
ゆんさ夜ゆしこさ人れとめとまり給・さらはうぎ
ゆたく心をつくしゆるひとる・いとようまくて
まけれるが・まもらく夜ふりとせつまも泪ぞ落る・
あまよごさしうこう後うさなでつ・けづることをもうり

さがりたまへど・おりしのけぐしや・いとくらなるう
もれし給ふて衣(あれ)ようしろめたれ・うぐらりま
なれど・いとくらぬ人もあり抱を・こひめ(紫ノ母)君は十二
まで・とのまをくれおしほど・いらじうものいせひ
しりのへりしぞうし・ただ今をのれうすてたてま
いがいりでよまおもせむとすんとて・いうじく
なくをこ(涼ん)ゆふもすぐろまうるし・お(紫)されごうちまも
さすがようちまもりて・ふしめなりてうけぶし
しるまうぼれかりしるうみ・ほやくとめでる
うた程
おひたむあるうもしらぬ(ゆ)草(くさ)ををくら

寸家(つね)ぞこさしんそしたまさまるゐらかしれげ(お伽云)
まとう地をすさて
(お伽云)
ちり菓れおひ(ゆく)来(蓋)も志らぬまるいかぞか
家のさしんとすらんと(さこ)罕ゆり程(北山傳郎)そうじあるる
ようさて(僧都詞)ふるるはあらそしや侍らん。そふ志もし
まおくしましけるかれ。このうられひじ罕のうる。
源氏(光ド)の中将のわらはやこまじたまひまもれし給
けるぞいまなんさつ年侍りいうじう志のび
給かれバえ志り侍らでこうる侍りなぐらけさふ
らひまもまうでざりけるとのうまへはあるいうじ(尼志詞)
やいとあや志ささ海と人やこつらんとてすぐれ

おろしげ。この世にのくしり給。ひかる源氏がく事
はいでこそしてまゐりたまひんや。よ代すてたる
ほうしのくちまもいとゞう世のくれへにすれ。
よそひのづる人の所(三)あり多き海なり。いぞ所をうそこ
罪むとてこしをとすれば。かへり(源)のひぬ。あくれ(源ん)
なる人をこしるかれ。かれくこれ(供ろ)すさもれども
たゞろかりさをのこしてよくさるまじき人を
もこしくる。ゆかり。たまさるしたち出るゞよかくこひ
のほかなることをこそかくおかしうおぼす。さても
いとうしくしかりつるちごうか。なるべきなんかれ
人の所かりに。明(あけ)くれのるぐさめにもこぞやと

めか心ちうつくしきあはれなる人なり。僧都の御
でし惟光(これみつ)なとよびぞすゝむほどなるき前なれば、(源)君も
やがてたち給。(侍従)ひざおりまうけのものして、今
あそん人々すゞまおどろかれがほなるみへさぶらふ
げにこれはまことあり給ふとは、おぼしめしたるなり。
まびさせまゐらかとかれくしくせひめへてある。
ゆきのれむしろもかみだこまこそまうけ給ふべ
くれいはいさきとしやまへり。(源侍)いめつ十よ日乃
ほどかりわりしやこをまづつひ給をさびうきなり
てふへかう給ればへのもへのまにずまくうえり
よかゆり給つれどかやうなる人へのちかうしあるは

さぬときゝしたまうべきもゝだなりもいと
おしうせひのひつこえてなんいたうしのび侍り
つゝいまそなるまもとのまへ申すかいち僧都（そうづ）
まいりたまへり。ほうし（涼ん）なれどいと心ぞづしく。
人がともやんごとなく。せるしもれのへる人なれば。
りがくしたきけりさ夜をけしたるうちぼせて。かく
こもれりほどのけもれがたりなど申しのて。おなじ（僧詞）
柴（しば）のいほりなれどすこしすぐしたき水のたのがれも
けんぞさせんとぞちまこさしのへぐ。かれまうぐ（涼ん）
こぬ人ごまことくしたういひこさせつる代。つくま
しうおぼせどあくれなりつゝ何りさ夜こもいぶ

かくておりしめげるいとゞ心こゝろよしはりて。
おなじ菊をもう人なしめへり。なまめきこゝろ
されば、やつも水こゝぐりにとまぎうろたどまる
まいりもりしこれをおもていとゞまげるたりしひ
みへりぞゝぐさきもれ心みゝそわりいで、ごやう
きうのちごころよひまちゝする。源のれよひりぜ
いこゝこなれば、うちの人ども心づかひすべりめり。
そうばよみつゝなすさみだれ物語のちの世のしな
ど思ふもてせしまふ。源氏がれつゝれほどおぼそろし。
あなさなまさしくる心をとめて。いかゞざりされを
さかひなやむべきさなめり。おして後の世のいらじ

かゝべきほとおぼしてたそ。やうなものすまゐをませ
まほしう思しめされける。かゝるの面かげこゝろ
まかりて云くれば。こゝまされしてまつる
られまかるかずねまさらしてまほしうこさゆめとうらまん
しくれ。ぐふちまんと思ひあるをつらとさきてのまへ。
うちわらひて。絶つけなかれ後がくりまぞ御
なる。君させのそても。たゞころをとりもたせぬめべし。
右摂家大納言いふまなくて久しく成侍ぬれば。
えたちしめさじかし。それ木のるなんなまがし
がいもうとも侍り。それあざちかくれて後世をもむ
さそ侍りがこれじろ力づふしと侍るまうらく

京にもまかぞねぐ。これもしどころこゝろもりて
もれし侍なりと申し給。かれ大納言（源詞）のゝむすめ
抱しゐふとゝきゝしまゝへしハすきぐしきゝ
にハあらぞ。まめやかに申ゆゑなりと。をしあてに
のこまへぐ。むすめ（僧詞）にひとり侍し。うきてこの十よ
年（ねん）にやなり侍ぬらん。故大納言ハうちにてまれ
らんなどうしこゝいつき侍しを。それはいのごとく
ももれし侍ぞすぎ侍ましかば。こゝ心あまごさ
ひとりもてあひかひ侍しほどに。いかなる人のし
けざまか。兵衛（ひやうぶきやう）の家（こや）なん志のびてかたらひつき給
へりけるに。もとれ和（こきこ）のゝ御ゑごとろくなどしに。

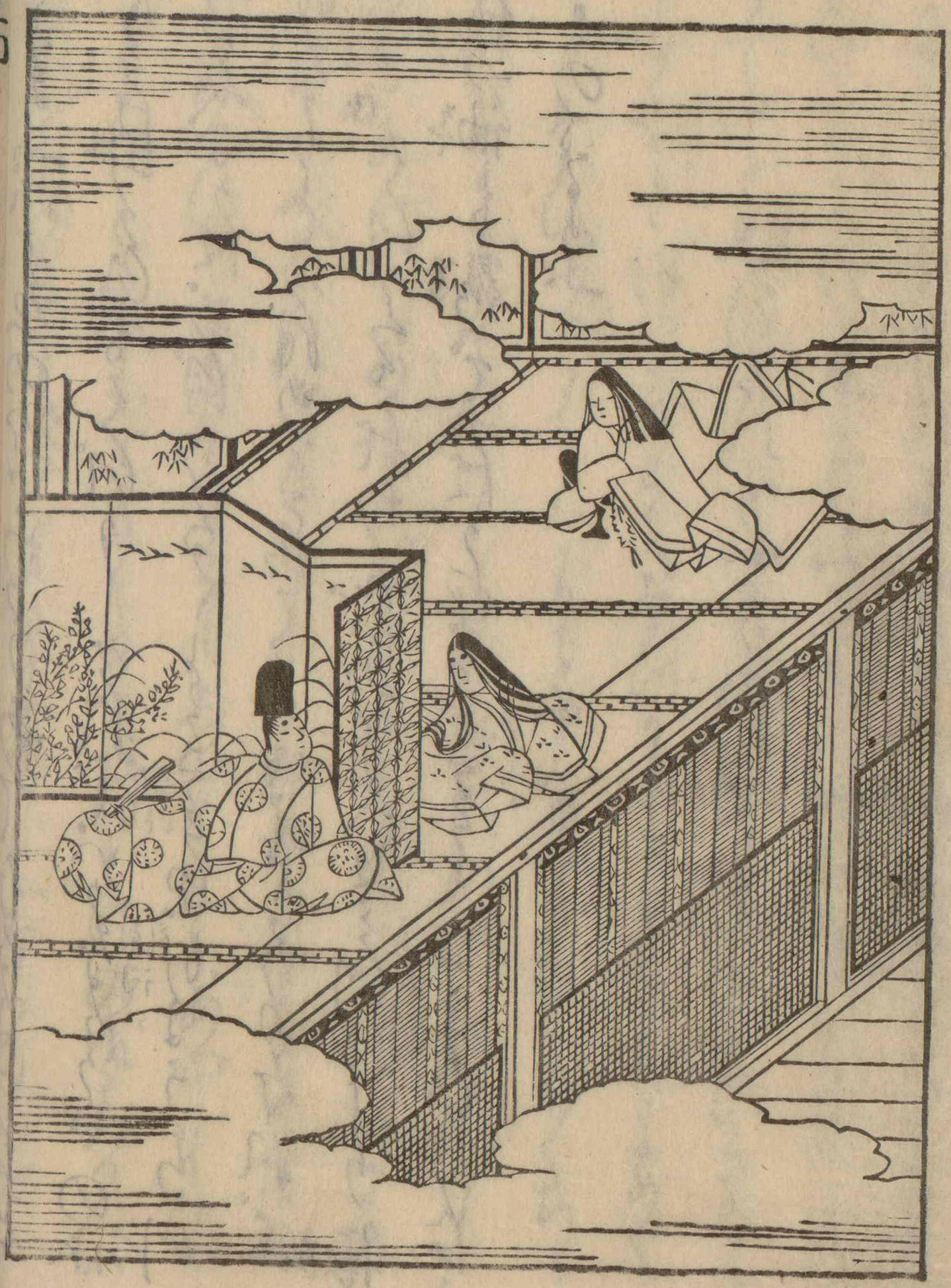
やすらぬことおほくて。あけくれ抱をさひてなん
なく奴侍(なりたぐり)なし。抱さひはやまひづく抱と。めはちゥ
くこゝのへしなどやのふ。さしば(源ん)それこなりかりと
おぼし。何ゝをれ。こゝ。それはすぢまで。それ人をも
かゝひさてしかるやと。いとゞあれはこゝまほ
しく。人の程(ほど)もあてはおしう。中くのさしら
心なくうちかたらひて。心のまゝはをしへおほし
そこゝばやとおぼす。いと衣(あれ)は抱しうまふこと
れ。それはとゞめ給ひこゝもなきうと。おされかり
つゝゆく濤(ぬ)のなをこしうはしらまほしくてどひ
のへば。なく(僧詞)なり侍しほどまこそ侍しが。それも

女にてぞ。うれにつきてもれせひのもの申しにな
ん。よもひのすゑにおもひこまへなげき侍めると
きこてあ。されば（源ふ）よとおぼさる。あや（源詞）しきことなれ
ど。おさるまきけうしろうにおもほすべく（きこ）罪給て
んや。ふふ心なりてゆきうこづふうこも侍りながら
世に心のしまめにやあらん。ひとりずゝにてのこな
ん。まゝにげなきほど。うれの人におぼしなずん
て。くしこるくやなどのまへば。いと（俗詞）うれしうるべき
おほさゞとなりはまゝむげにいとけなきほどに
侍めれバこゝふれにてもけんじがらくやそも
く女も人にもてなされこゝ。おとれにもなり

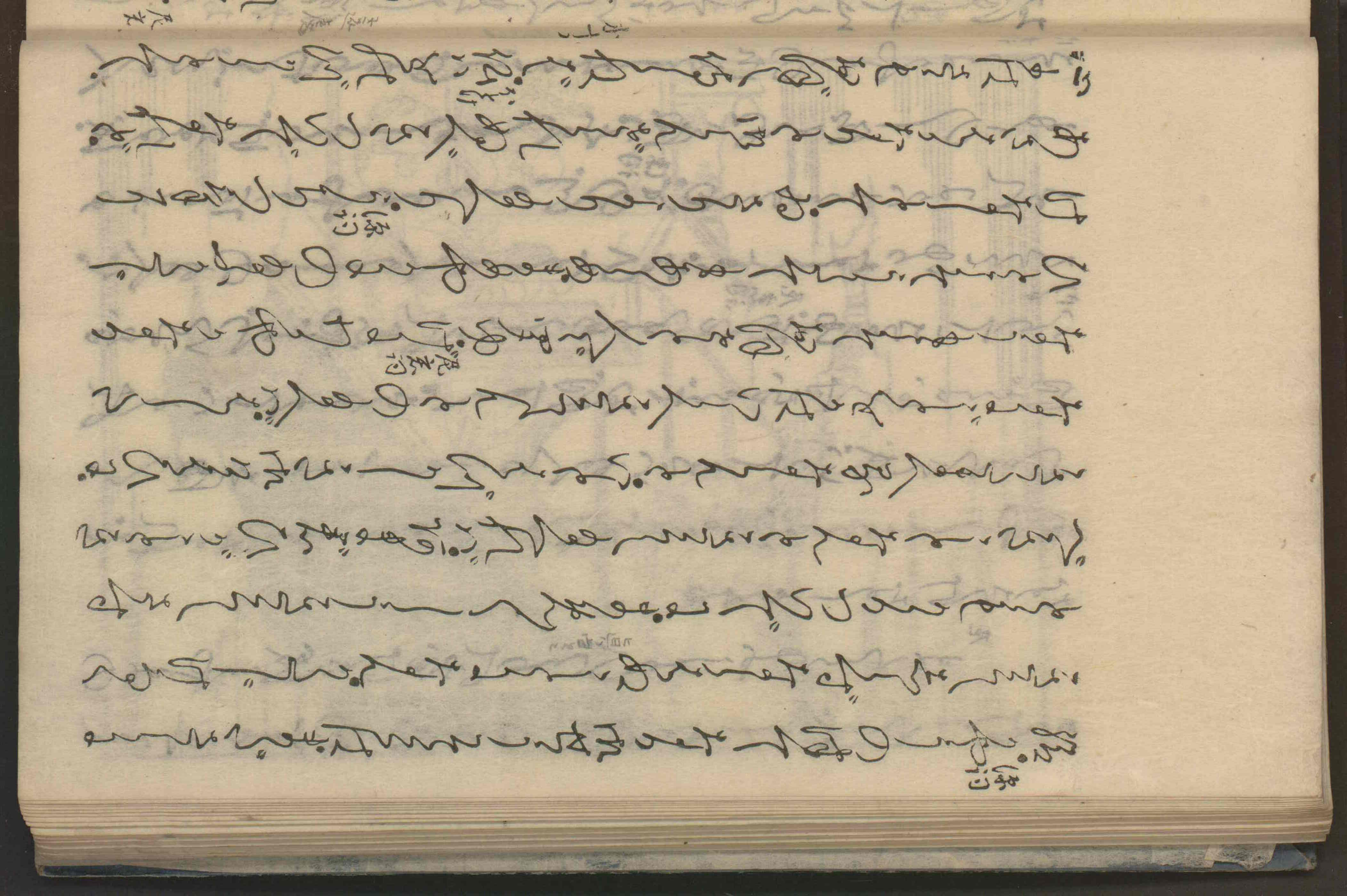
給もれなれば、ぐくりしくハえとりやさず、それをだに小の
うるかうらひ侍て、罪(さこ)さやんと、すくよりまいひ
て、もれこそさき後しのへれば、わ(源)うきはいまとげ
りしくて、えよくも罪(ゆ)給ひず、あ(僧詞)うぐ佛(かとけ)もれし
給ぐうますると侍るころまなん、そやいまぐつと
め侍ぐ、すぐしてさふらひんとてのぼりのぬ、君(源ん)は
いちもいとなやましきまゝ、面すくしうちそくさ、山
風ひやくうまふきさうまゝ、瓶(こき)のよどみもまきりて、着(とと)
さく罪ゆ、すくしねふらげなるど、經(さやう)のしくぐす
ごくさきゆうなど、すぐろなるひともさろうら
もれ衣(あまれ)なりまして、ぬもほしめぐらすことあほ

くてまどろまれぬかぎそやといひしかども。夜
もいたうふけはかりうけはもんのねぬけたひしに
くていと思(しの)びこれどずぐのけうそくはひさるら
さるくとと目のさくなけうしうふちそしあく
ととなひ何(言ひ)てくるなりと思ふまて程もなくちう
れがとまたてわたしたる屏風(びやうぶ)の中とすうし
ひきあけてあふぎ(久ちヨが)はなしまへば内ノ女(ね)はるさ
うらすべかあれど。きてしし思やうまくとてね
さり出るひとあるりすうしたぞさて。あやしひが
みしやとこどうをきてまて。浦(添羽)とけの此たるべは
くらきまつりてもさうまうぶまじかなりものとと

のこまふ。ぬこ息のいとわうあてなるまう。内ノ女 地いで
んこはづかひもなげしかれば。いかなるかこの地
しるべまかは。おぼつるくとこそゆ。げ 源詞 まうち川
けなりと。おぼめきたんもことなりなれど
源 なけくされわの紫のうへをこいるより 猿 ぶ
ねの袖 そで も露 つゆ ぞかはか思。とこそしまひてんや
とのこまふ



門ノ女詞
さらはかやうの花をうしそこ。うけまりわくべき人
もくのし給ひぬさ夜ハ志ろしめしたりげなる我。
これはかハとさらぬ。を（源詞）のげかしさるやうなりこる
ことゆゑなりしんと。さひなしまへかしとのまへだ。
門ノ女
いりてこさらゆ。何ないまあうし。これ志やよづいたる
ほどはおもす事とぞおぼすん。さるまてハこれ
わらさ我いかでさいまへることぞとさ夜ぐ
あやしきは心もこぶれて。ひさしうなれだ
なさけなしとそ申
尼
まくらゆふしよひづりの家けさ我こやまの
こけはくらべざしなん。ひがこうし侍り物をとこそ



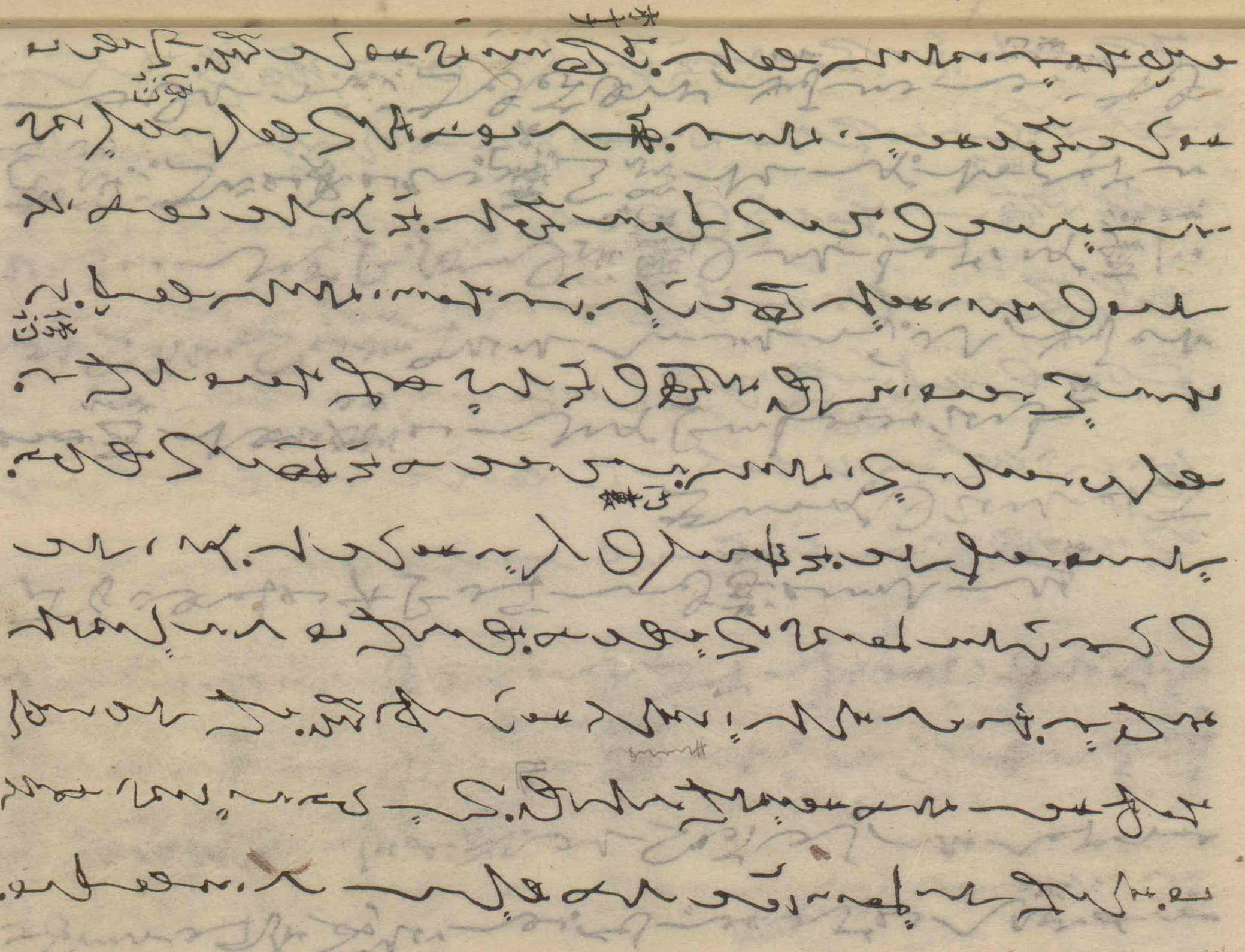
給。（源詞）やうのはてなりれせうそうはまぐさしる
さてしぶらずなりもぬことなんかうじけるく
ともかうついでまゝ。まゝ（ヒ過ノ音ヒ）めくしうさてしさす
べきことなんとさうしまへれば。何まぎひがことさ
きうまへ家なりんと。いとはげりしきれなひま。
なまごとをかはいへさてんとのまへばしさ
なうまとてお目をと人ぐ罪ゆ。げ（尼宏詞）はわかやかなる
ひとこそうしてまあしめまめやかなのまふうじ
けなしとてゐさりよりまへり。うち（源詞）つ手ア
あさちかなりとゆらんぞられぬべきついでなれど。
心はさもお目し侍れば。伝（かとけ）はれげりとて。

おとれくしたうくげりしげなるつまれてと
こゝもえうち出ぬりぜ。げ尼詞はしひぬへよりがこさ
ついでにかくまでのこ海をこさてしさすなを。
「うさくはいりぐとのぬふ。あ源詞くれにうけ給ける御
「紫りさ海をかれすぎさ紫ノ母ぬひにけんけりくりにおぼし
なにてんやいふかひなき程のよくひにてむつまし
かゝべき人にもたちをくれ侍にくれぐあやしう
うさしうやうまて逢月をしてかさね侍れおなじ
さ海にもれし給なるをこぐひになさせこまへと。
いとさしまほしさ浅かりおりも「りがこくて
なん。おぼされん可をもくぐうしぜ。うち出侍りぬる

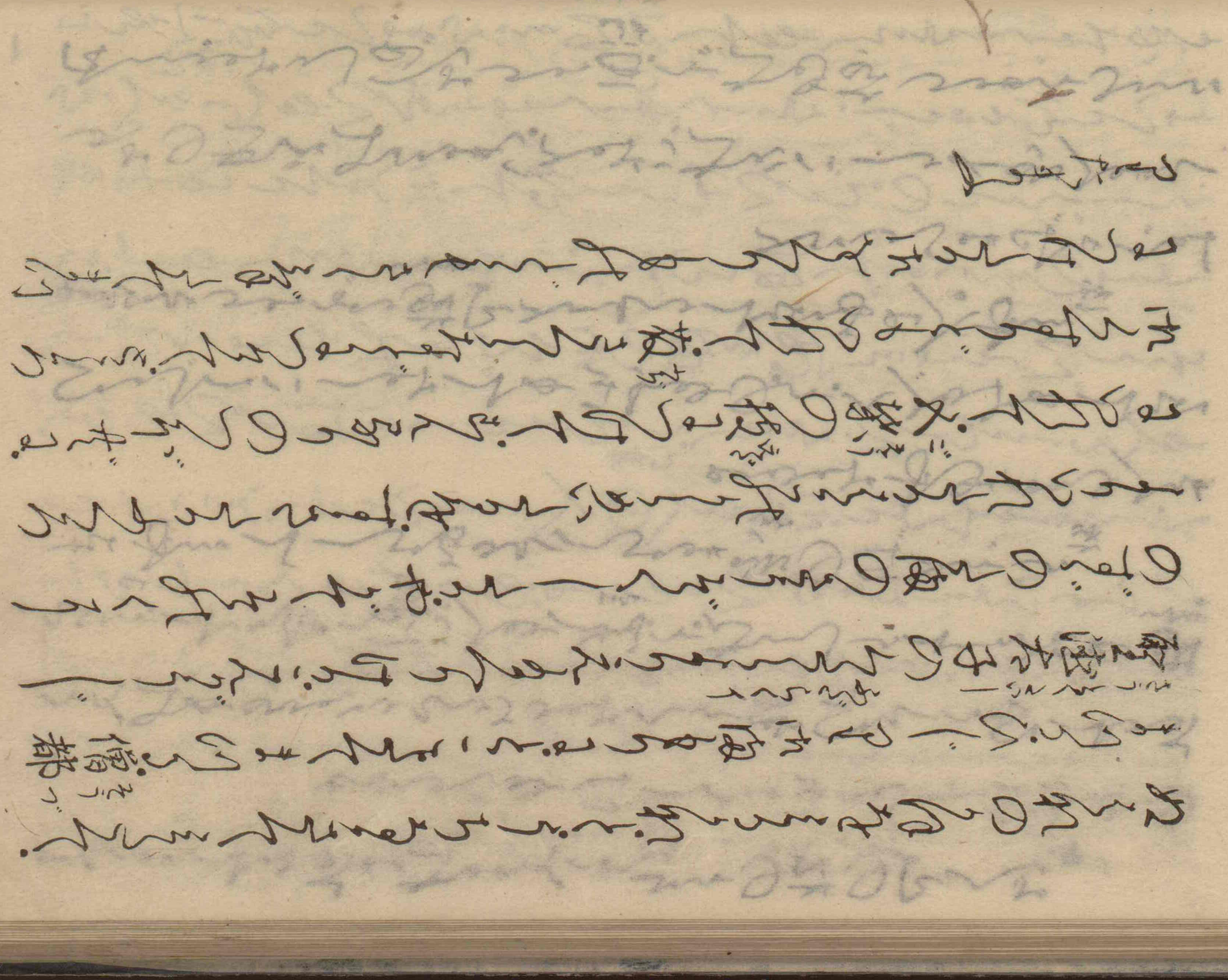
とこさそしまへだ。いとうれしう心ひとまへぬべき
れことながらも。こさそしめしひがめらることなどや
侍らんとつましうなん。あやしゝさまひとけ
とこれもしべにすゝんなん侍れど。いとまぶいふ
ひなきほどまて。ぬらんじゆうさうくらも侍
まがるかれば。えなんうけまくりとゞめられざり
けりとのまふ。これおぼつかなかしぎうまくり
ものぬ。ところをうおぼしくゞうしで。おもひまへ
よりさ海ことなり心のほどをぬらんぎよとこそて
まへど。いとまげなきことをさもしてのこまふと
おぼして。心とけさうれいへもるし。僧都おくし

ホ十八

めればよりしら聲そめ給めればごうとしきめり
うたんとぞしきて經門曉がるゝ響まうれば法花
三昧並にたまふの懺法の聲山おろしにまつさ
そう見えくるいくうくされしきるひゞきなひかり
わきまおいて山をろしにて夏さめて洞ま
はすゝきのをとれ
むしぐさに袖めしけり山冰ますめの心に
さればやはすみてあれ行まくりやとさてしのぶ
明ゆく空はいとゞ露ぞて山のとりたもそへは
ましたくさしづりなひさり君もさしめ木草の露
どもなくまちりまじつとまてしほんだ花もけりとまゆり



こころとまり侍ぬれど内(清)よりおぼつかながらせ
たまへ事もかしこかれば なんいまかれもれのおり
すぐさずまいりたん
(源)こやぐまゆきてうたん山(ぎて)楊がどよりさきま
ほそてもみるべくとのまふれもてなしことづかひ
さへめもあやなかるる
(僧)うどんげの(夕)菅まちしろ心ちしてこやさ
(ぎて)楊は先にそうつたれど(きこ)宮人まへば(源)ほくゐそ(詞)どさ
ありてひとしたび起らくなるいかなかもれとと
のまふひじつれかくしけぬいりする
(聖)おく山の松のとがそとまれはなかてまぐこ



源地
まんハひじ里よりうじめぞ程(きやう)志つゝ得うしのゝ事だ。
まうけのもれども。さ海ぐにとりにはかゝしたり
それバそれわたりのやまがけまでざうべさ和ども
こまひ(三)れず程(きやう)などして出給ちにそうじへなて
それこさて給しことまるびこさてしなへぞ。尼司ども
かうもしでいまいこさてんかるなすしもしれこう給
ざしけらバ今(いま)四五年をすぐしてこそいどもうく
もとのなへぐ。(俗)ざんとおれじ。さ海にのこある所。
源
はいなすしとおぼす。れをうそこそうじのもとか
ちいさきわらしそ。
源
夕弓ぐれはのうに茎(くき)の色(いろ)をそてけさハ程(くすこ)

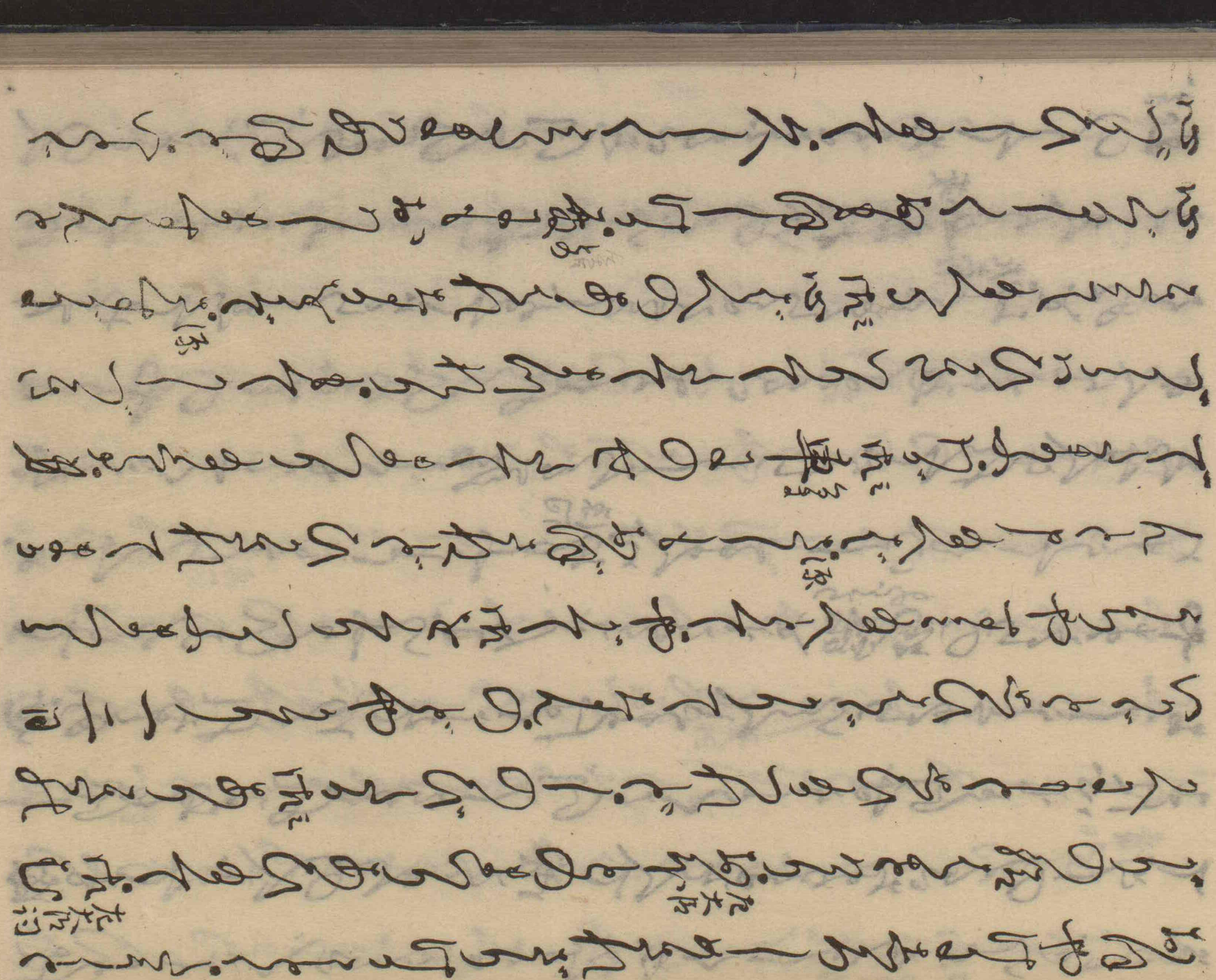
のたちぞわづらふ此返し

尼 海ことまや菊れあたりいたちうきとうす
けり雲の章父をもたんとよしあるてのいとなて
なるとうちすてかいたまへり此車まるてまける程
大夫 左大臣 よりいげちともなくておりしまりにけること
とて此むへの人ぐ云進などなまるゝ来りのへり
駅中将左中弁さらぬ君ぐちもしてひ四九てかう
やうの此ともはつかうまつり侍らんとおもひのふる
とあさましくとくらせのへることく根きて
いといらじき菊のけりまじりしもやすらぬ立
入り侍らんはあらぬわざれとのまふいたしづる

れの苔(こけ)のうへはなまぬてかけらけまいりおちくる
水のさ海など有(ゆへ)あり澁(しさ)のもと也。弘中(とうのちうじやう)ぶとしろ
なりけり笛(ふえ)とり出てふきすましたり。弁(べん)の表(きこ)扇(あふぎ)
くらなりうちなりして。とくらの寺(てら)のしなり
やとうしぶへよりいとなる表(きん)ごちなりを。源氏のさ
ミいくくうちなやこそ。岩(いそ)によりゐしまへ家は。
こぐひるくゆきしきれなりさ海にぞなるごとに
もめうけるまじかりけり。例(れい)のひちりとさふくずい
ぞんさうのあしもせしうすき地などあり。僧(そう)
都(づ)さ(琴)んをこげかしもてまいりて。これ(僧行)しぐれて
ひとりあそぞしてお前じくは山のとりもれ

どろかし給へんとぞちまゐらしめへばこそ源詞ぐり
ぐちいとしらへがらさもれをとゝさしらまへど
けまくかゝぎかさなすしてこれしちまひ始
あぎくちおしといふひなさほうしまらべ
もなまゝをおとしあへりおしてうちまゐ年おい
しろあまごさしらまゝとさしまかゝへのれあり
き夜をこぎりつれがこれ世のもれともおぼし給
しぎとさしあへりそうげもあれなすま乃
ちぎりまてかゝれさ夜なすがしいとむけりしさ
日のもとのすゑのすまむまれまへんとゝるま
いとなむかるしきとそめをしのどひ給このわ紫ん

ぎおさかごちはめでたき人かれとこのひて。宮(ミヤ)の御
行りさ後よりもまさりのみるかれなどの給。さらば(円女詞)
かれ人の御こゝは(あり)ぬておかしませよとこゝゆれど。
うちうかづきていとようありなんとおぼしたり。(紫)
ひゆかあそびまも思ひいまゝも源氏のきこと
つくり出てこゝよしなりさぬさせうしづきのふ。(源)君は
まづ内(法門)にまいりのてひどろの御物語(がたり)など申(きこ)しの。
いと(法門)いたうおとろへはかりとて。ゆくしとおぼし
めしたりひじりものこうとうりけることなどとゝせ
たまふ。(源)くくしく(そう)奏しのへば。あざり(法門)などよもなり
ぐきもれまゝてあめれ。(源詞)とこなひのらうにつもりて。



むのうてなまこぐきまたらひよろげをとこのへ
こまへり女（菱）ぞれいのくいうれてどみまもいぞ給
くぬをおしぐをちまこしまてからうまてやうり
まへりこぐ思まうきしまもれひめぎこのやうま
しまへられてうちうじろき給こともくうぶ
りうてものしこまへばおもふこともうらうすめ。
やまうちの物語（ものぐち）をもこしんまいふりひあまて
おりしうこまちいへしまたもすぐこそ何くれなまめ也
まは心もとけずうとくとげしこまもれまおもほし
てどしのうきなまるまへて此こころのへどそも雨
さるをいとくるしくぬりずまとさぐくしよれ

なのなましまへなめぬ。女（養）ぞさんふかこもいりなりぞ。四九（さこ）
わづらひなてうちなげきてふしなへるもなまに（地源ん）
つきなきまやあらん。ねふるげまもてなして。とり
う世をなぼしらぶることなほかり。ぶれ（源ん）わらくさの
なひいぞんほどのなをゆしきぼまげなきほどし
しへりしもことくりぞうし。いひよりがらきこと
まもあらうなぶいうまうまへてしぐころやすくむん
とりてあけくれのなぐさめまもらん。兵（ひやうぶきやう）の衆（ミや）ハ
いとあてまなまなめいなへれど。まほひやうまなども
あらぬをいうでうれ一（ひと）ぞうま荒（おが）しなつらん。ひとり
きさいぐらなればまやなどなもほす。ゆりいと

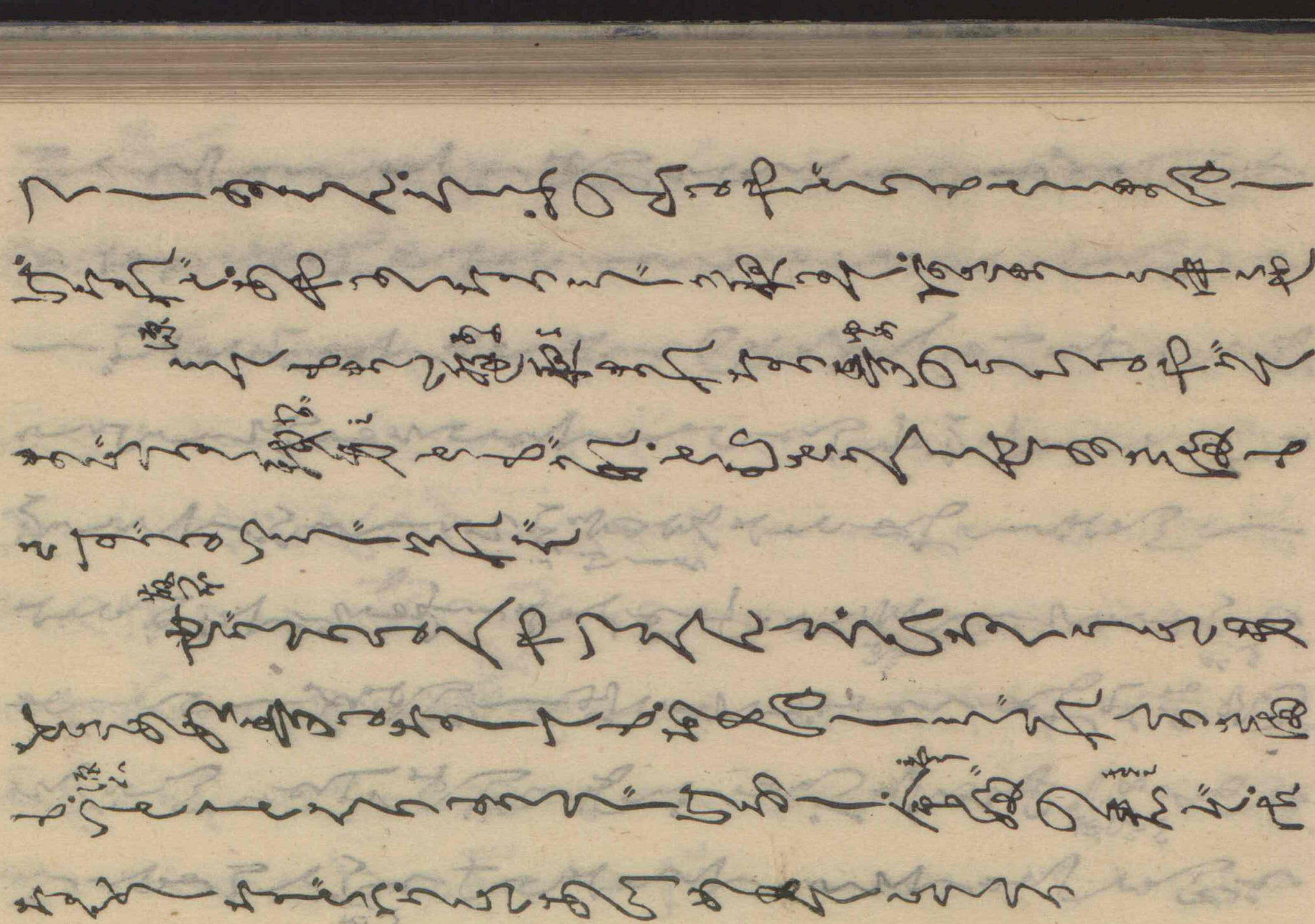
むつましきまいらでくとゆうおもほせ文の日れ文
こそまゐれぬへり僧都(そうづ)まもほのめうしまゐべし
なまうへにはまそ(文ノ詞)てくたれたりしれそしきれほく
ましさまおもひぬゆゑ海をもえあらりしくて分
らずたりましとなんぞぐりこそゆるすてもとし
なべこしぬ心ぎしのほどをはらんじしたしばいかま
うれしうなどありたまりまちいさくひき結(むすび)て
雨(係なり)ハ身(こ)をもたなれず山猟(ざつ)心のうぎりとめ
てこしらどれれまれ風もうしろめたくなんとあ
はれてなどハさるまれまてしてくらるくをしつゝこ
めるさ海もさぐすぎしうれ発どもなはめもあや

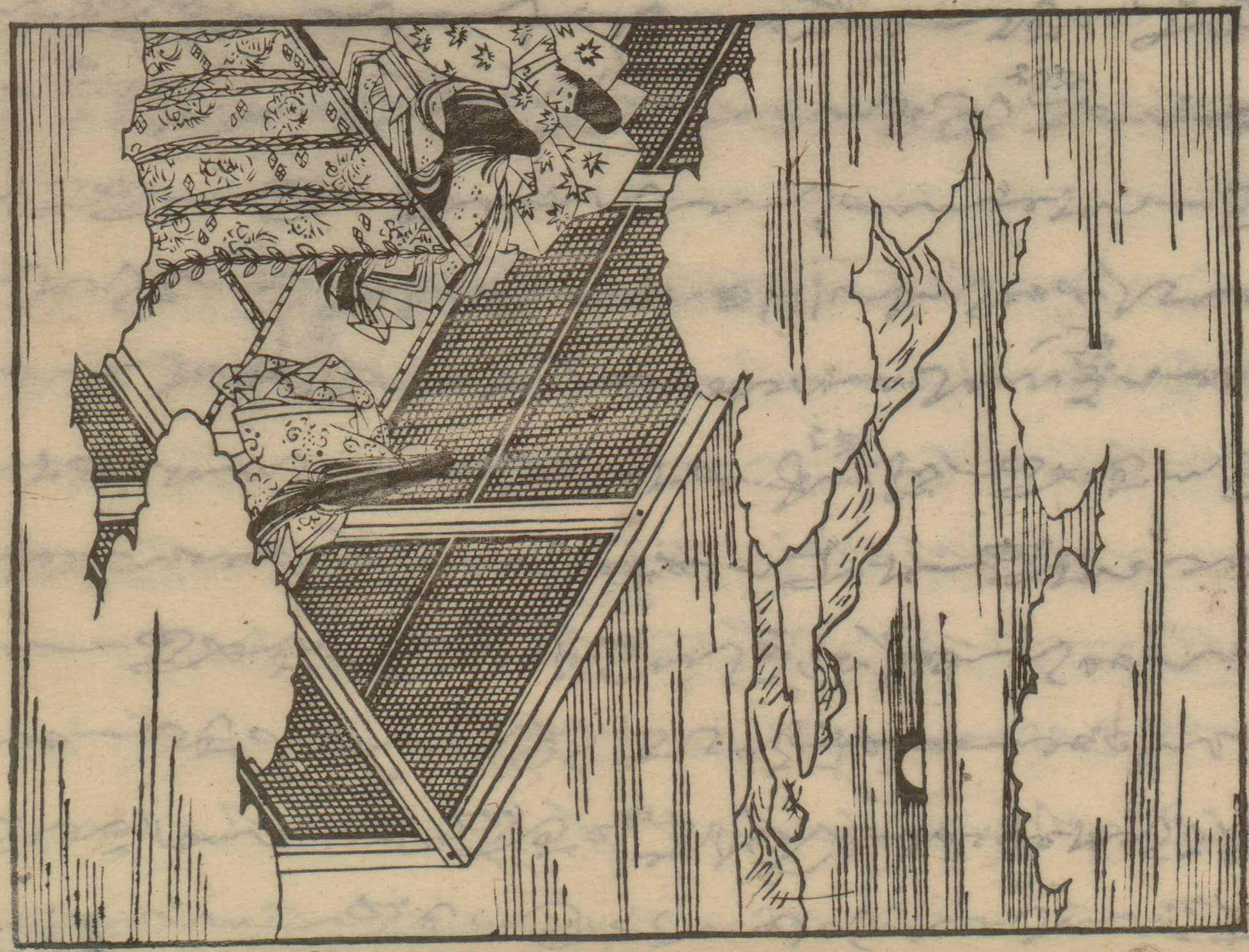
まこのましうこ程あ尼ん なかるこいしやいかゞこさこ
えんとおぼしまづしふゆ文行くての所ともなす此
さりまもおもひ人なまれしをふりまへさせ海
へるまさこしさをんかるまなんまごなまかぼを
ごまさかぐしうつゞけまへべしざあれバかひるく
なんざても
あ尼しふくおの人の揃さ ちらぬまをころを見ん
けりほどのつるさいとぐうしろめこうとあり。
そうぼの所へりもおるじき海なれバ源ん ろちおし
くて二三日ありて惟光云をぞこそまつれまか納云の
めのとゝいふ人あ置し。こゞのてくらしくかる

ちんなどの給ひしす。さもかしめん海なりき。此心ろ
れ。此ぞうりいたけなげなりしけりひをまほなる
ねどもしほどを。おもひやるもおりしやぎとりう
此ふしあるを。僧都（そうづ）もうしこまりきてしまふ。お納云（せうなごん）は
をうそこしてあひたりくりしくおもほしの給さ
まおほりこの此ありさ海などうろことばおかりう
人まてつさぐしういひつぐれど。いとまりなき（お納云詞）
此ほど後いりまおぼしてかくゆくしうなん。雅（れ）も
これもおぼしける。此なるみまもいとねんごろまうい
あてかれ此たれちがきなん。なほそおんまほしき
とてれいの中なるまは

徳 あさくら山あさくは人をゆくゑはおなじ山のお
のけきもちりもん成りへし
尼 へくるめてくやしとこそ山のおのあ
されちがしやうげとしすべきざれ川もおなじこと
ともしこ程ざれわづらひのみちしるしくこゝれ
ぞろすゞみて京の都はわかりのみひてなすんでうき
さすべきことあるを忘もとちずねもはず。よそうずかの
こやおやと為とおはりてまなでよそへうべ流へのちば
はりるざりたげき聞えの流くしこきも。いくいやく
おしこうそてまうりなのざしうりおりざてもと心も
あくざれやおがひて。いづくまもくまうで終りなず。内

まても罣(さと)まてもひるハつくぐとながめくして
ゐるれハまう命婦(ぶ)をまめありきこまふいうくこ
ぞうまけんいと(添ん)わりなくてこそてまつるほど
さへうけしとはあぼしめぞまびしきや安(なつかん)もあさ
ましりしをおぼし出るごまよとくもれ此地ひ
なるぬさてごまやこなんとふう覚(おぼ)しくるるいと(添ん)
心くていこじきれ(こけしき)多なるもれりしなりし
うちしげまさりとてうちとけず心ふうくげり
しげるれもてなしなどのなんを人にさせあるぬ
をなどうなれめなることごまうちまじつ嬉ばり
けんとうくうさへぞおぼさりしなまごとをかけ罪(きこ)

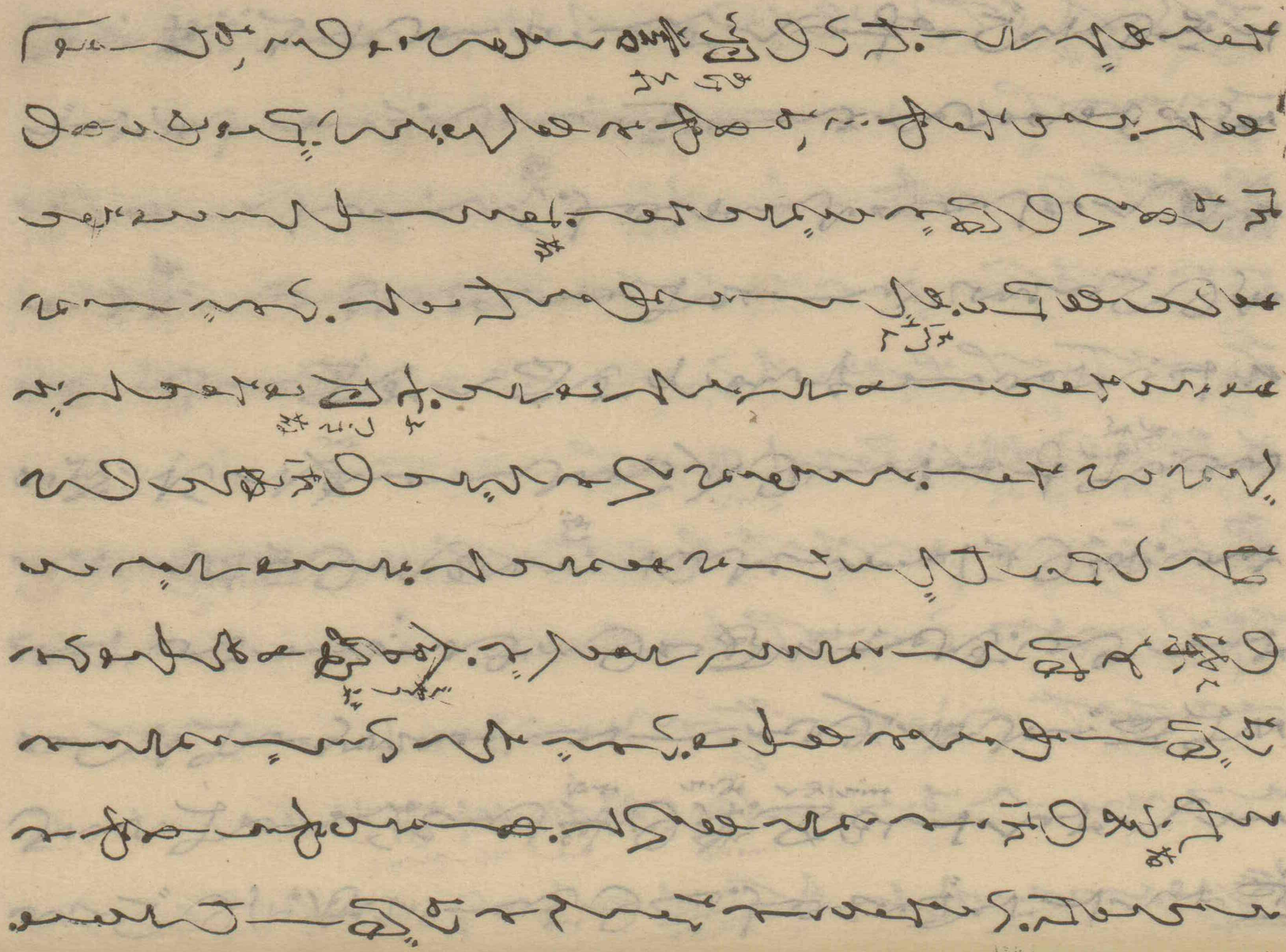




源とれまおりしてなきまゐしつゝ給川にふゝ
なぞもれいの（若いや）はしんじいれぬよしのゝあれば（源ん）つね
のことなすがしもつゝういとゞうおもほしほれて
うちへもまゐりて二三日こもりおきすればまゐいるゝ
まゝと（源ノ）はこゝろうごりをすべかめるも（源ん）おそろしう
のゝおもほし給（若ん）こゝやもなすをいとこゝろうきゝ勇なり
かりとおぼしなげくまなすやましきもまきりのて
とくまいりのべきはつゝひしきれどおもほしも
しゝずまことまはゝちれいのやうにもおりしまき
ぬはいりなすまゐりと人しれずおぼしてことをなりけ
ればこゝろうくいるまんとのゝおぼしこゝろあつ

さほどいとぐちさもあづりかず。ゑ(懐姫之)にさまるり
かへいとしるさかどまて。人ごゝろてまつりとが
はるゝ。あさましきはすくれほど心うし。人はしひ
よりぬことなれば。これ母までそうをさせ給はずり
けうしくおどろきつかせ。けがはこころひとりまへ
しうおぼしわくしともありそうはゆどれなど
まもしうつうまつりて。何ものはけしき(ミ)気をも
しるくうなりしれり。はめれとごれ弁(べんのミヤウ)命婦などぞ
あやしとしへどうこゝまいひあるすべきなし何
ねぐなはのがれがたうけはすくをとぞ。命婦
そあさましとしふうちまははもれけのま

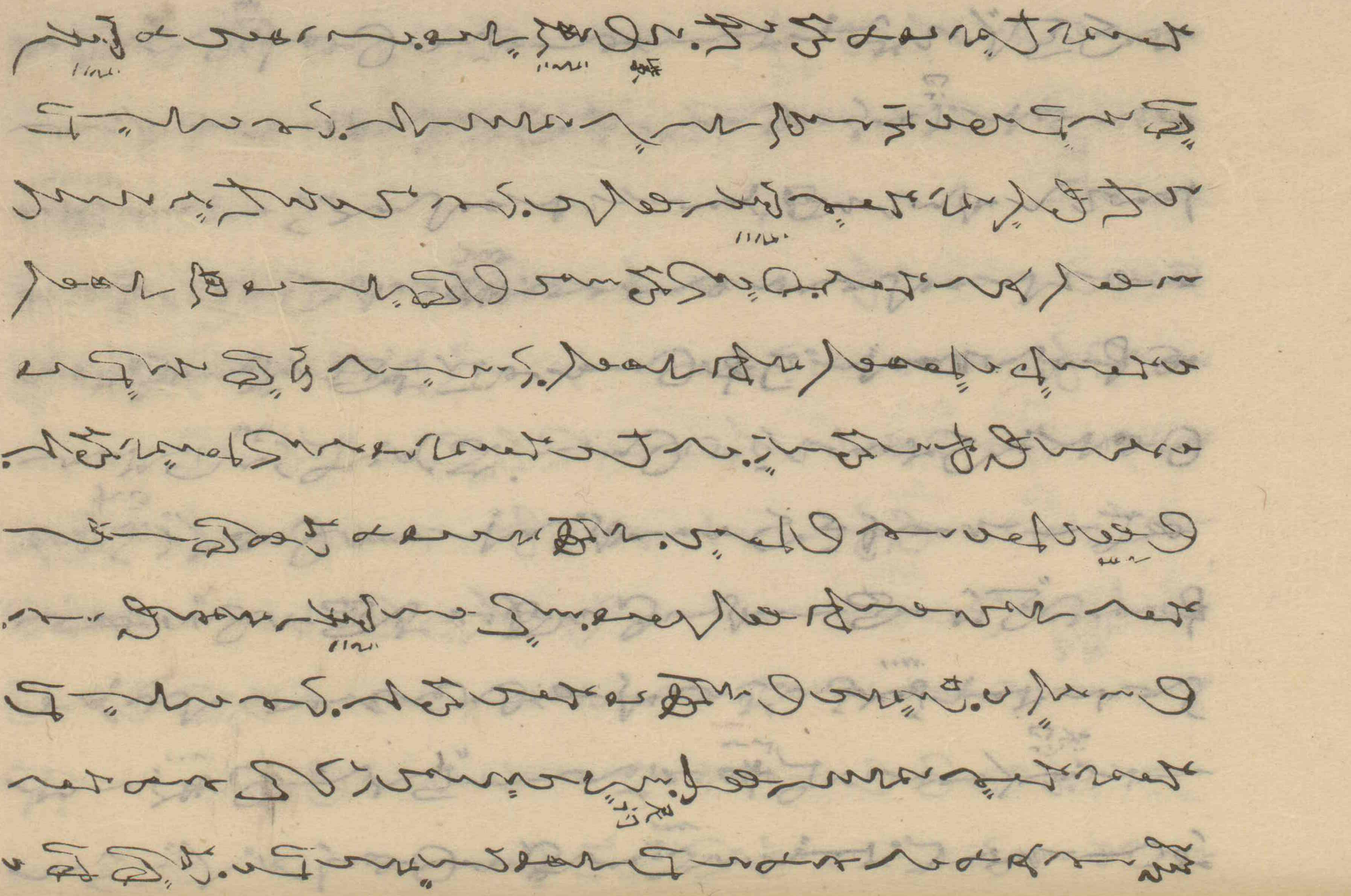
ぶれまてどこまでしこまうおりしましけるやう
ようぞやうしけるし。これ人もされこおもひやり。
いとゞ哀(あれ)まかぶりなりおぼされて(こ)ぬつゝひなどの
ひまなきもそ(なん)らおそろしう。ものはおもはあ
しと陳(ひま)なし。平(源)ねのあしもおどろくしう。さ海こしなよ
ぶ夢(ゆめ)をこめてあくすらもれをめしてとりをかへ
とよびなうえ(おぼ)しもかけぬすぢのことをかりをやり。
それなりまゝぶひめけりて。てしまをかふべ事
ことなん侍といふ。わづらりしく笑(おぼ)してぶ(源詞)りら
のゆめまはあらず。人の所ことはかゝるなり。此ゆゑん
あふまぞ。まゝひとまゝまゝぶなとのあてこゝろの



て此あそびもやうくかりしさころなれば源氏乃
君もいとまゝくめしまゐしつ此ことふえなど
さ海ぐまつうまつらをまふ。いうじうつゝのへど
志のびがたきはしされもり出りかりく家も
さすがなりことがらをかほくかぼしつゝ年
かりかれやまぞらの人ハよろしう奴ていぞ治ま
はり。京の此すゝうらぶ。とゝさぐの此せうそこ
などありおろじさ海ゝのこあるもことわりなり。
これ月ごろ無あるとしてりまさるもれさひま
ことくなくて通り。秋の末つゝいともれころ
ぼそくてなげきまふ。月のかしさ夜。志のびらる

所(ところ)まかりしてせひ立(たち)のへるをしぐれめりて
うちそくおもしする所(ところ)へ六条(ぢう)京極(きやうぐく)わたりまて内
よりなれば・すうし程(かぐ)とをき心ちすると・ゆれたる
家(いへ)のこぐちいともかりて・こぐらうえしたる所り
例(れい)のはともまたなれぬこれこれなん・右揚(こあ)家(ぜら)の
大納言(ひとひ)の家(いへ)は作り・一日(ひとひ)もかくたりまとふひて
作しかば・かれあまうへいたりよりのまたれば・なる
ごともあげしずとなんとて作しとこさこゆれば・
あそれのことやとふふべりけるは・なまどりされ
んともかれをざりしいりてをうそこをまとの
あへば・人(惟光)いれてあかいをさす・わざとくたちより

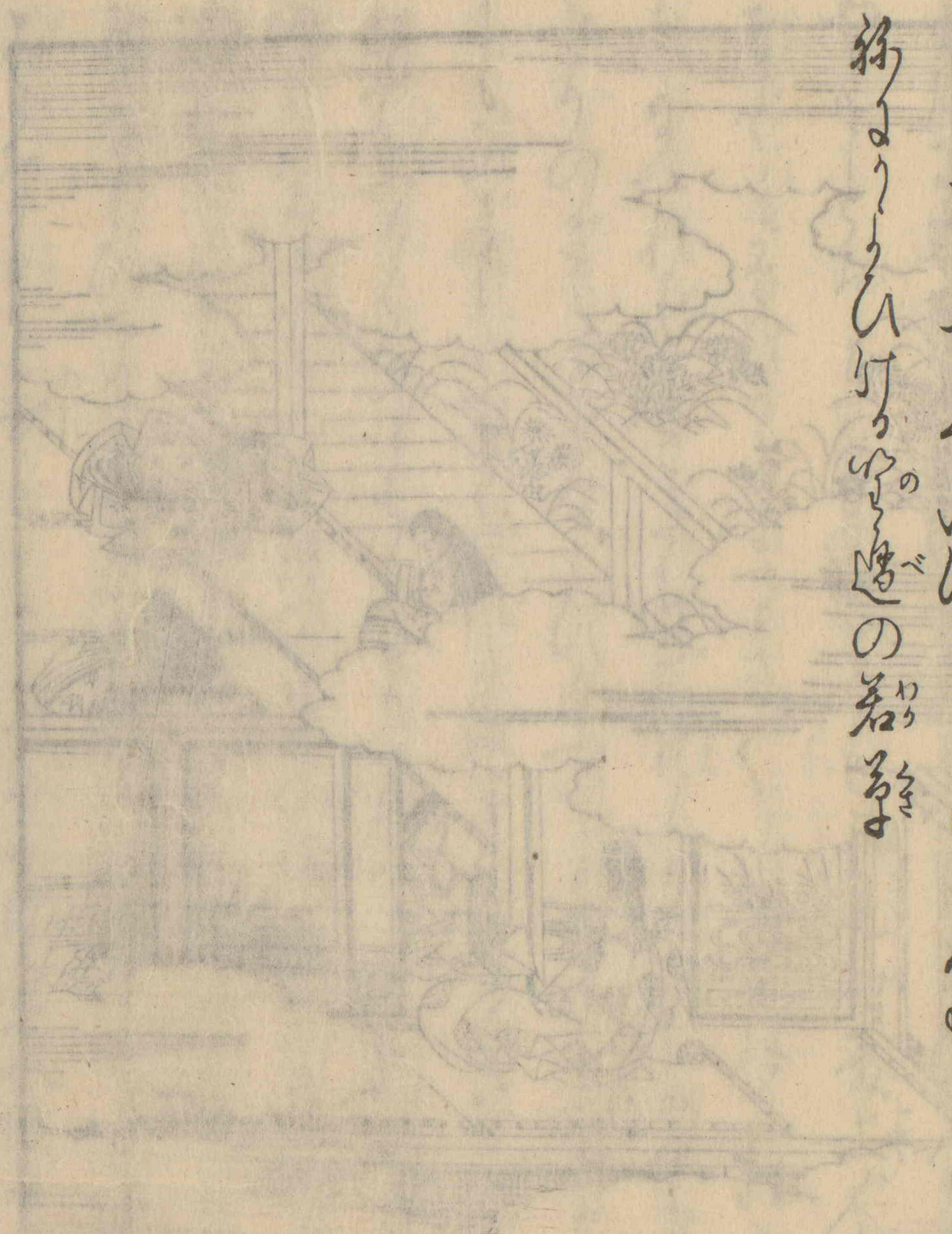
ゐるゝしとくいたきこれぞいりてうくれとゐしひ
まなんおりしましたるといふまおどろきていと
うくくらいたきことこれこの目じろむげまいとる
のもしげるくなるせまひまこれぞ此こいめん
などもなるまじといへどもか色しこそまり
らんとかしこしとてみなるれひさしひきつくろ
ひていれこそまつるいとむつしげまなれどかして
まりとぞまとてなんゆくりなうもれゐるさおま
し所(どら)まなんとゐるゆ(添ん)げまかる所(ところ)はれいまこぞひて
おぼさうつね(詞)まさひのへこちなうしかひなるさき海
まのこもてなきせ給(まふ)まつてまれ侍(さぶら)てなんなやませ



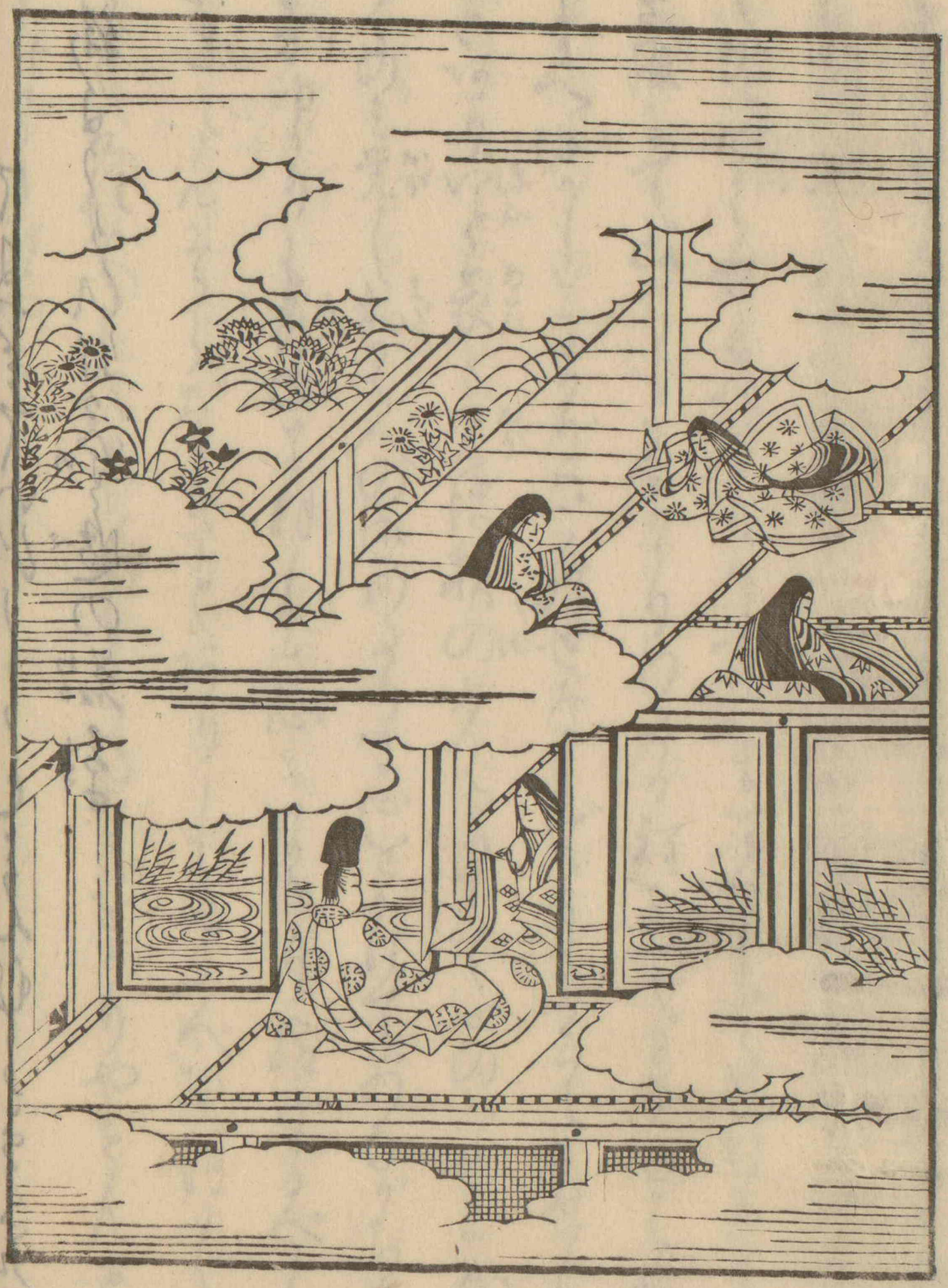
おもひけるべきなれど、たゞしばしかりそめのほどのみあつかふれは
さてまておはしまさくもひ給へんことゆゝしう
すぐしきこえさせまゝしそまつらんいかなる契は
こゝろそまへりそめしかり、哀(あはれ)はせひさゝこゆるも
あやしきまで此世のことゝおぼし給へぬなど
のみぞかひなき心ちのし侍れど、それはいとけなう
まれしまゝあはれひとゝおぼえて、かゝるとのおんべらる
やうがはおぼしそめさせ給はおぼしとのごとあり
いりて、たゞ宮ゆかりしもあるまじうつゝと
しそへしてこそ、これ寺(てら)はありしげくての君(きこ)えこそ
おかしきあれ、なほこそ給ぬとのまふと、人くいと

かるかしいてしとせひて。わかかまとこさしも。いさこ
しかば。ゆちのあしさなすぐさめさとのおしかば
ぞうしとうしこさことさてしうりとおぼしての
まふいと（源ん）おうしとさまへど。人ぐのくるしと思ひ
これぞ。さうぬやうまて。まめやかなすれとふこひを
さそしなさまてかりまひぬげまいふひなのね
もひや。さりともいとようをしへてんとおぼす。文の
日もいとまめやかまとふこひさそし給。例（まい）のちい
さくて
いたけなさこげのひとこ思さてしよりあ
しまなすづむ。毎（ね）ぞえなるぬ。おるじ人まやと。と

さらおさるくりきなしまへるもいうじうおかしげ
なれば。やがて此手(て)ほんまと人ぞ男(きこ)也。お納云(せうなごん)ぞ男(きこ)し
ころ。(久ノ羽)ちらせまへるなかふ波もすぐしがこげなる
夜まで山でらまありわるる程まで。かうとなせ
まへるかしこまりに。これ世なしでもまてしさせん
と申り。(源ん)いと哀(あれ)と荒(おが)須(地)秋の夕をまして心のいとまな
くのを荒(おが)し乱(こぐ)る人のあるかりま心をかけてあるがちな
かゆりも郡(こぐ)まほしき心もまきり始なるべし。
きゝんそうなるきとなりしゆゑべおぼし
いぞられて。しひしくもまゐるゝぶをとりやとんと。
さすがまあやうし



てまつきていひしりもこんむらさきの
称まうらひけるの遣(べ)の若(わか)挙(くき)



十月に朱雀院の行幸あるべし。まひんなどぞ
やんごとなきき家のこどもも上達部殿上人ども
などもそれかたまつさぐしきは。これえら
をまへれば。こゝろこゝろだ臣よりもじめて。とり
どりのざしどもなるひまふいとまなし。山ざとびと
まもひさしうなどづれし夜はざりけるを。おぼし
出てふりまへつゝしうりかれば。そうげの遊事
のこゝろ。文ノ詞ちぬる月の廿日のほどまなん。はぬる
事なしくこゝろまへなしてをけんのごうまなれ
どかるしひしまふなどある後こゝろまふ。世中乃
よりなきも哀まうしろめたげまさへりし人も

いかなるんおされさほどまとひやすらん。ここやす（源ノ作母）（どころ）前は
とくれしてまゐりしなど。そらぐくしかしほど
せひいでゝあさかしぎとふしひゆへり。お納（せうなごん）そゆへ
なりしぎれかへりなどをきてしたり。いとなどすぎそ
京のとのまなんとをきてゆへば。ほ（源）どへてこゝのうの
どうなる（よ）おりしたり。いとすごげまあれたる前（ところ）の
人ずくなるまいかまおきるまさへおそろしかんん
とこゝ由れいの所（ところ）まいれしてまゐりて。お納そ御（こ）
ゆりさ後などうちなきつくきてしゆぐくるまあい（源）
なりけれ袖（そで）もしぐなしぎ。宮（お御云詞 無アロ之）まわししそまつらんと
ゆるぎ。こひ（紫ノ母）めぎこみのいとなきけるくうきものま

おもひきてしまへりしは。いとむげにちごなりし。
よもひのまぶさくぐしう人のおもむけをもん
しり給はず。なりぞこなりけほどまて。あまるも此
給なり中此。あかづらしき人にてやまじつ給りん
なまど。すぐ給ぬりもよと此におぼしなげきつるも。
しるきことおほく侍。うくらづけるきなげのけ
しとの紫ハのちのけこころもしどり笑させず。いと
うれしうやひまへられぬべきおりふしり侍り
なりぶ。すこしもなずしひなりさ海にもれしし海
いぎけらしよりもわりびてなしひしまへれば。いと
かるはらいてく侍とこそ。なりかうくりへし

きこえしたしする心の目どをつゝしまゝふんその
いふかひなきはなりさ海のあれはゆしう覚え
ごまのふも契(ちぎ)りしとまなんこころながらしひ志ら
れける。(なを)狂人ばてなしできこえし志しせばや
あしわれ(源)海(うら)まころあいかくともこゝしこち
ながらかへる波(なこ)かはめざましかんとのこまへハげ(お納云詞)は
こそいとりしこれとて
よろなこの心も志しでわれ(お納云)海(うら)にしまもか
びかんほどそうきこゝろ。わりなきことくこゝゆり
さ海のなれこるは。すろしつゝゆられ。ふ(源)なすぞ
こしざらんとうちすじめへるを。身に志してわりき

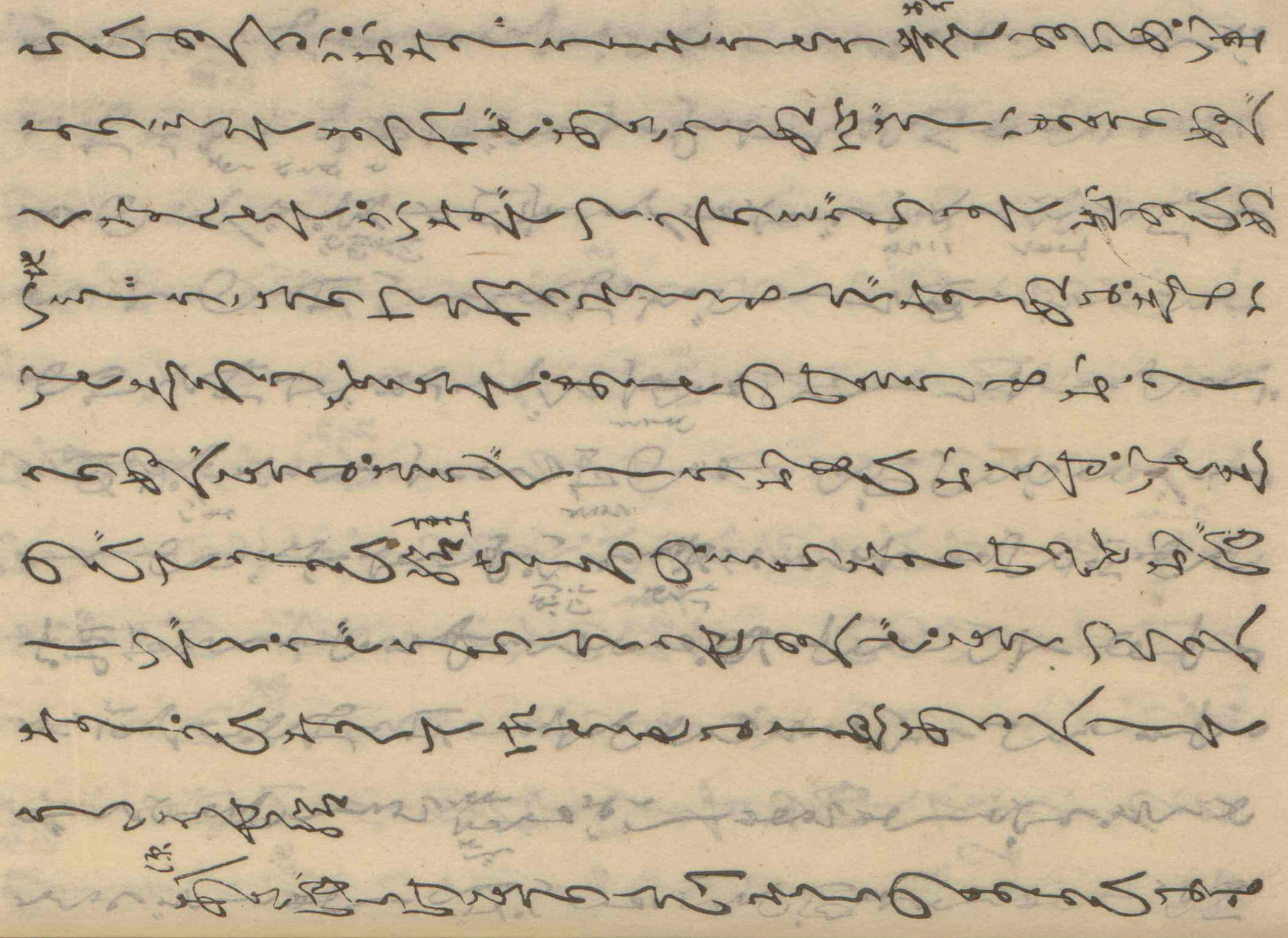
人ぐおもへり。君(紫)ハうへ(尼)をよひきこしめてなるさ
かしめへるまれ(三)何そびぐさどものなをしきる
人のおとすり。家(兵ア口)のおとしますなめりと男(こさこ)ゆれバお(紫)
きいでゝてお(訂)納てよ。なほしきりつゝんをいづ
らゝやのおとすりかとてよりおりしろれと思いと
らうしし。家(源訂)にはあれど。又おもほしハなるべう
もあらず。しらとのまふを。(紫)なげかしうりし人とすす
がまきなして。何しういひてぐりとおぼして。
めのとまさしよりて。いざうし。もふるきまとのまへ
だ。いまさらなど。(お納去訂)思(志の)びまふんこれひざれうへり
れどのごもれよ。いまする(源訂)しよりまへとのこまへバ

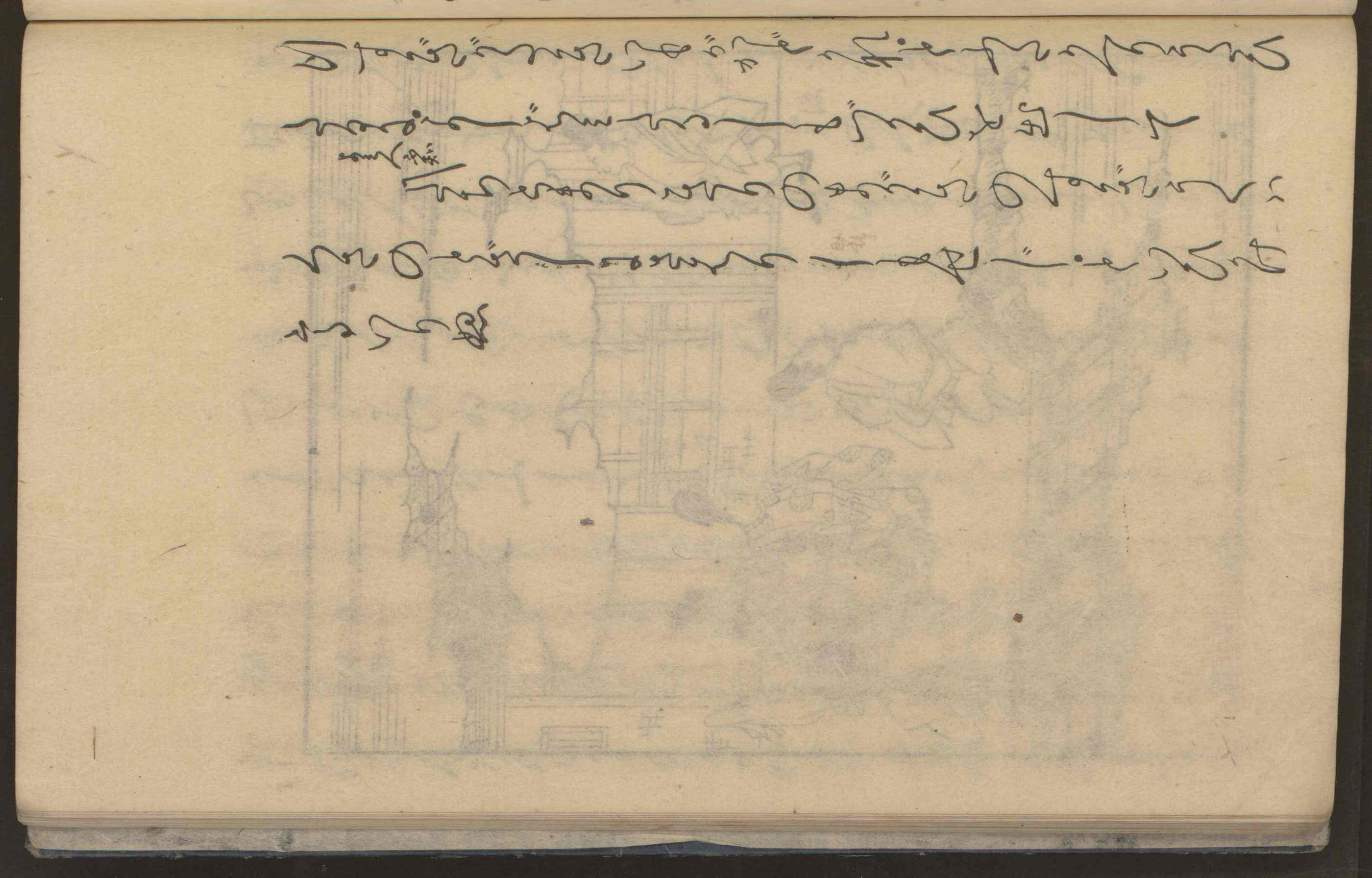
めれとのされバしそうよづかぬれほどまてなん
とてぞしよせしそまつりこれバ紫なる心もなくぬ
しまへるまて源とさしいれてさぐりまへれバなよく
うるうれぞようこいつやくとうりてすゑのふき
やうまさぐりつけれたる程どいとうけくしう
さひやらてととしへたまへれバ紫ん うして例れいなるぬ
人のくらづきまへるはおそろしうて訂なんと
いふもれをとて志のびてひきいりぬふまつ源さて
すべりいりて訂いまは まろぞおもふべきへなりとこ
まひそとの給まふめれといぞ何かうしそやゆく志う
も侍うれつさてしさせ志しせ給とも さしまふまかり

しるしも侍らじ把をとてゝくるしげまさひとれば
さりともうち出ほどをいかゞもあらんなれば
よるまゝぬ心ざしのかどをとてしるへとのまゝ
あられぬり何れてすぞきよれさ海なりいかでかう
人ずくなる心ぼそくてすゞし給(まゝ)らんとうちかい
まていとゝまてがたき程(かど)なれば こゝうしまいり
○もれおそろしこさ根のさ海なめりをとの井ゞん
まて侍らん人ぐちうさふらはれようしとてゝ
なれがかるみ桃(ちやう)のうちよりきいぐきていりのへだ
あや(内女)しうおもひの侍りまもとあきれてゝれもく
ゐたりゝめれとはうしろめたうかりなりしとゝへど

あしまのしうとうしさくべきなれだうちなげ
きけるゆゑり。わ(紫)がぎぬいとおそろしう。いかるるんと
わるゝかれて。いとうけしきれたぐつきもぞろ
さむげるおぼしたる紙(源)らうしくおぼしたるひとへ
ぐりををしくてゝ。わが(三)れこちもかけいうこそ
おぼしのへど。衣(あれ)はうちかしひのて。いざこまへよ
おかしきゑなどおぼくひゐかはそびなどする所(とろ)は
と。心はゆくべきことをの給(まゝ)けくひのいとなけか
しきゆ。おされきこちまもいというもとぢず。
さすがなむけりしうねもいしずおぼしてこゞろき
めしのへり。地東ひとよ風ゆきあるくはげ(円女)よりうた

もちざうしまゐりければ、いかさまころはれそうらはし。おのれ
じくわうしき行ほおりしまゐらせて。さくめ
きけんへりめ。わたしをはかりそろめくさるまいぞ。ちくわうさる
わ風すゝしうきやうらす。殿はいでおかる
とありがたなりや。源詞 いと哀まことそまうされあり
さ御を。今ゐましてうる時のまゝあはつうかなべし。
あけられなずみもてさぶる所にとへまうしそまうさん。
うてのことはいゝで。あれをぢしし御とぞうらう
とのゝへだ。少納言詞 またも徒然なくへはなすで心念ぬめれど。
それ流四十九日すぎてやなすぎをひのあるとこそ
ゆきだ。源詞 それかしこすがたすゞくもぞよそてくすてか





まゝ人もいでこねばかへるもなまけなすれどあ
けゆく[そら]もちしるくて[源]どのへおりぬおりしう
ひつゝ人のなぞりしひしくひとり思ひしつゝふし
こまへり日こうおほとのごもりおきてふきやり
まゝかくべきことのくもれいなすねばふでうちをき
つすきひねまへりおりしき思なぞをやつとまふ
うしこまはなふしも[兵ア]宮わたりこまへりどしどろ
よりもこよなうあれまきりひろうまれかりさる[とゝろ]前
のいとゞ人ずくなまさびしそれぞ[兵ア]こわたしまて
[相]かゝる[とゝろ]前にはいかでかしぞしもおされき人のすぐ
し給ふんなをうしこまわたしてまろりてん

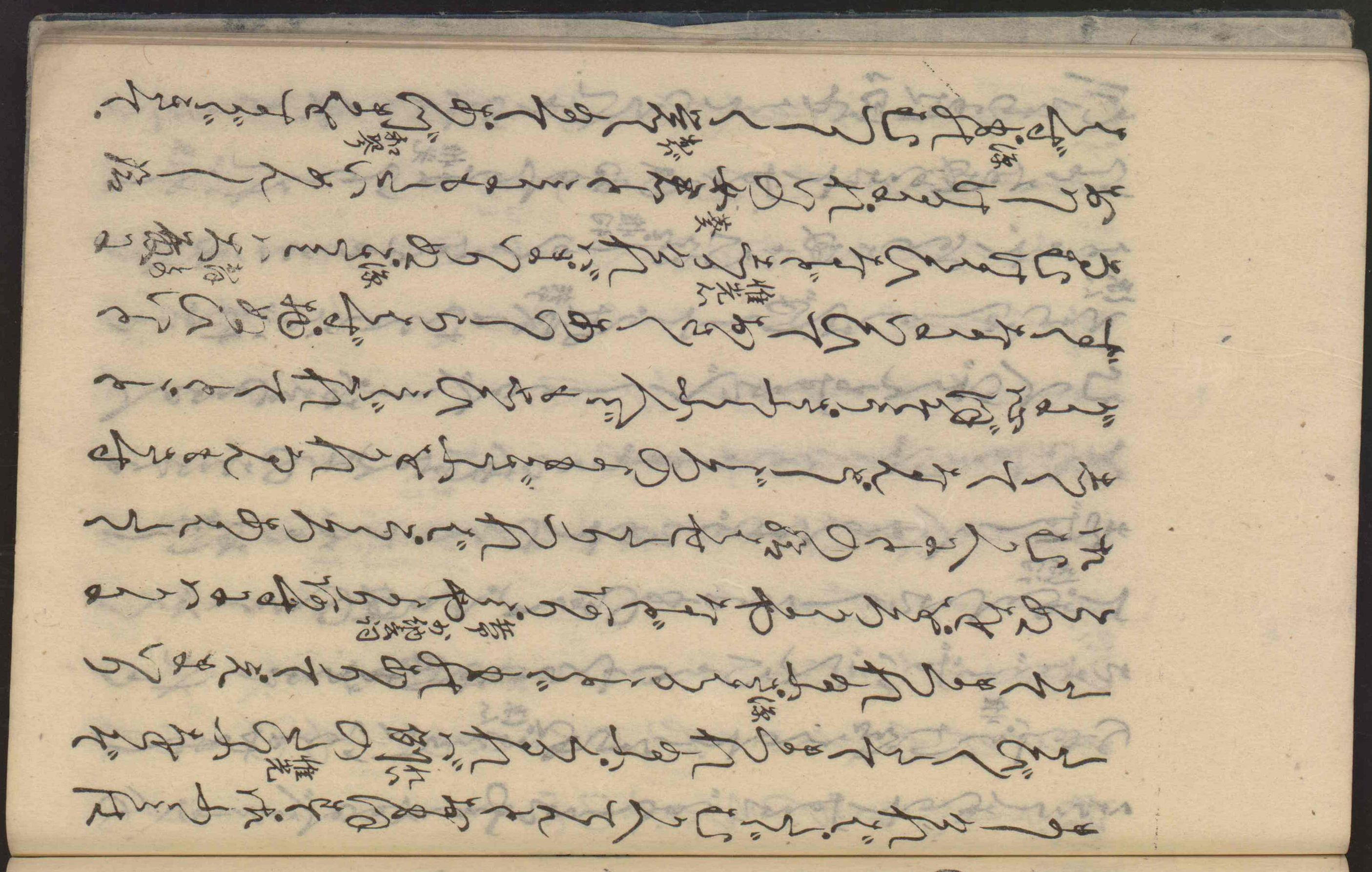
なるの所をさほどまもあらずぬれとはさうじ
なぞ志てさふらひなん。君（紫）はわるきへごなどあれば
もろともあそびて。いとようもれし給なんなど
のまふちうよびよせてまつりまゐりうの所
うつり香（ガ）のいとじうえんにしきうへりまへれば
おかしの所にほひや。所ぞいとなべてとこゝ後
ぐるしげにおぼいたり。としごろもあげ志くざぶ
すぎまへる人にそひまへるより。時ごうしこゝに
わたりてこゝなるしきまへなどもれきしを。あや
しうなどこゝまて。人もこゝろとくめりしとうろ
おりにしも抱し給なんも心ぐるしうなどのまへば

お帥会詞
なまかはこころぼそくともさぶしいくておりし
ましたまんすくしものゝ心おもほしきりなんまゐる
らせ給ふんとそよくハ侍るべかれとこそ申ふる
ひるゝひこそしかふまゝそうきもれもきこし
紫ノ尼を
めさずとてげ地いといふおもやをのへれどいと
あてまうしくしくなりくこそのなまかさしも
帝詞
おぼすいまはよまなきへのれこと無かひなし
とのれあれだなどくらひ罪(ふさこ)のてくるれバ
らせまふ後いと心ぼそしとおもひてないのへバ
紫
帝
こやもうちなきのていとかうしひなりのそ
詞
なふあすわらしてまつらんなどゆくこしらへを

きて出ぬ。なぞりもるぐさめがこうなきぬ
へりゆくさきれ男のあんことなどまでもおぼ
し忘ぐぐとしぼちもるるおりなうまい
もしなひて今ハなきへと如ひまけるとお
ぼすがいとじきるおさるきれこちなれどむ
はとふるがりてれいのやうにもあそび給ぎひる
もさてもまぎらし給をゆぐれとなれだいと
じうくしぬへだうくてはいでうすづし給
もんとなぐさめまびてめれともなきあへり。
源君のれもとよりいとれこれをしてまつれ
へり。詞まつりくべきをうちよりめしあれがなん心

ぐしうこそまつりしまさば心やすくとてどの
ねんごろにまつれまくりおちごきぬのうまもあるべしとて
これまでもまめやかにまうされしとは心えこそし
めしつけばさふらふべくのところなりすずきさいちま
れんあかりしこゝのつかでまいらけなくうち
いでさこしさせまふたまどいかもぞれとはなるは
ともおぼしつめぬぞあさましきやお袖にこれ
こゝにき気ざすの物語どもしておりへてのちやさら
べきにずくをれば禄にさしあまぬやうもあらん。
よびいまはやけてもいとかげなきにしとくさくて
まうしとこやまさらおぼしの給ぞするまいりけり

此心にかゝるもひよりうたなうこゝぞれ侍りけるふも宴（音アミヤ）
わたせのひてうしろやすくつうまつれ心おさ
なくもてなしさゝゐかなどの給ひせつるもいと
わづらうしうぞなりはすきごともせひ
出されたべりつるなどいひてこれ人（惟光）もことあり
がかりや思給（おもひたま）たんなどあいなかれいたうなげう
しげにもいひなさずこいふ（惟光ん）もいかなることにかあ
らんと心しらうしふまいりてありさ海など四九（きこ）
それだあ（添ん）れにおぼしやられどさてかよひ海
たんもさすがにすぐろなる心ちしてうるぐしう
もてひがめたうこと人もやもりさうんなどつく



ひこちは田をよそつくれといふう夜をこゝ思ひ
いとな夜めさてすさひぬまへり。まいりこれば。めし
よきて何りさ夜とひ給。しかくなんとこゝこゆれど。
くちおしうおぼして。れ宮よりたりなば。わざと
むかへいでんもすさぐしうるべし。おさるさ人
をめすまいでこりとまどこさおひなん。そのさきる。
志ばし人なもくちがこめて。わたしてんとおぼし
てあつきうしこるものをん。くる夜のさうぞく
さながらずいぞんひとりふたりおほをさこれと
のあふ。うけ給とりてしちめ。こゝこはいかなせまし。
こさこしありてすさがましこやうなるべきこと。人の

程(ほど)ごゝ抱をせひ出り。女の心をくしけることとし
とられぬべくハよれつるなり。ちくこやのこゞね
いでこまへらんもりしるるう。すゞろるるべきとと
覚(おぼ)しこゞられど。さてそばしてんハいとゝろち
おしかるべくれバまゝ。東ゆう出給(ぞまゝ)。女(菱)君れい乃
出ぶくに心もとけずもれし給。(源討)うしこまいときち
まゝるべきことのくべるバせひこまひ出てるん。
立(たち)かへりまいりこさをすんとて出のへバさふゝぬ人ぐ
もしこゞりかりわがれかるまてれなをしなどハ
とてまいるこれこれぞりを馬(むま)にのきておりしぬ。
門(ぞ)うちたゝせのへバ心もしらぬものあけさらう

まぶ車をやなしひきいれさせて、しつゝつまどを
なりしてしはぶけば、お納そこきてしりて出きたり。
こゝるおりしますといへば、おさるまき人（お納去詞）（紫）もれとの
ごとりてなんなどかいと来ゆうしたちいでさせ
ゆへると拍のゑよりとおもひていふ。ゆへ（源詞）わたしせ
ゆべかなるをそれさきまもれ一ことこさてさせを
かんとてなんとのゆへば、なるまごとまかはもべん。（お納士詞）
いかまもかぐしこされいしへこさてさせ治もむ
とてぶちわしひてゐたり。こさいりしまへば、いと（お納云詞）
かゝはしいたくぶちとけてあやしさゆゑどもの
侍りまとこさてさす。まぶおどろかい治りぐかうてれ（源詞）

先さ海しこそこんかうかなさぎりをぐしたしでは
ぬかものかとていりたまへば・や（小納言）ともえこさてしず・君（紫）は
なほ心もなくね給つるを・いざさおどろかし給ま
おどろさて・宮（紫ん）の御むかへにおりしかとしをひ
れておぼしたり・御（源）ぐしかさつくろひなどし
なて・いざ（詞）たまへ・宮の御つかひまてまいりさつかぞと
のまゐる・なし（紫）ざりかりとあかされて・おそろしと
もひたれば・あか（源詞）心うまろもおるじ人ぞとてうきい
ざさていでなへば・大（たいふ）浦（せうなごん）の納てなど・こはいかにと望（こさこ）
侍・こく（源詞）に侍つるにもえまいらぬがおぼつかなかれば・
心やすき所（ところ）にとこそししを・心よくわたりなべか

なれば・まして・きくらくらべ・それだ・人ひとりま
いれよりしとのこまへば・ぞろあまたしく
て・ぞふいいとびんなくなん侍べさ・家のわたらせ
給えんなは・いかき海まかきそしやらん・それだから
ほどへてさるべきまおりしまさば・ともかうも侍り
なんと・いとおもひやりなきほどのことは侍れば
きふふんぞくるしう侍るべしとこさてゆきぶし
のちまも人はまいりなんかしとて・此車ともさせ
あへだ・あさましういかき海まかとせひあへり・わり
ぎもあやしくおぼしてないたまふ・お納えれぞ
どもひきさげて・ぞいりもらろしき・衣きぬきうへて

のりぬ。二条院（でうのゐん）もちゐられば。まだあらうなしぬ程（ほど）は
おもしてよしのこいはれくる海よりもておりぬふ。
十（紫）ゐをばいとかりうるよ。（源）うきいぐさもておりしぬふ。
が納てなをいと夢（ゆめ）のこちしもぐるをいうま
し侍るべきとにかとてやすらへど。（源詞）ゑはこころ
なり。（紫）汁勇づくしハわしとてまつりつれば。かへり
なんとあらばをくりをんかしとの給ま。（お紳云）ひて
おりぬ。まはうまあさましうむるもしぐ。文
のおぼしの給ちむしというま。（ゆう）ちてもべきれあり
さ海にかとてもかくても　これもしきへごまをれ
ものつるがいうじさとせふま。（あうぐ）洞のとぐましぬをさす

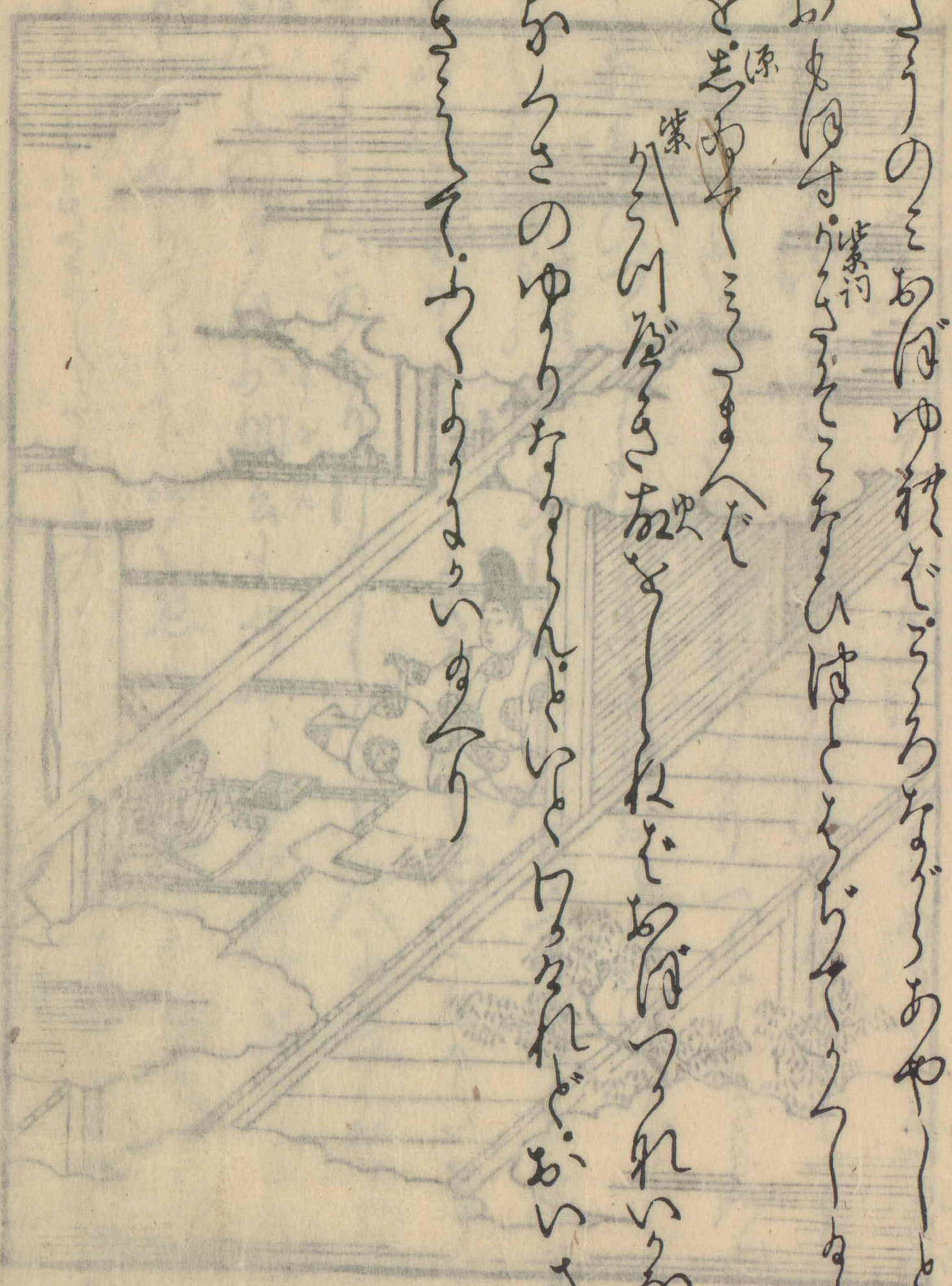
がよゆくしなれぞ。ゆんじぬたりとるるはすこ
あるぬこはなれば。此(ミ)拙(ちやう)などもなすりなり。これこれ
めして。此(ミ)拙(ちやう)は屏風(びやうぶ)などあたり(尚ミ)くしてさせあふ
此(ミ)事(ちやう)のうるびらひさおろしおましなどこぞひさ
つくらふぞうりよてあれぞ。ひんがしのうはり此
とのねもれめしまつりして。おほとれごとりぬ。
(紫)わかぞはいてしむくつけ。いかますことなしんと
おろくれしまへど。さすがまこ思ふてもえなさ給
くず。お納言が詠(もと)よねんとのあふこ思いとわりし。
(源詞)いまはさはおほとれごもあまじこさぞよとしへ
うきくしあへば。いてしまびしくてなさふしあつりめの

とはうちもふされずもれもおぼしずるさおしり。
あ宵ゆくまくまこわるをば。おしとぐ（か納云ん）のつくりざま
しつゝひざ夜ちしまもいとず。庭（ふハ）のすみごもしまゝ夜
りされしんやうまこしてうくやくこうちするゝ。
りしるくおもひおもれど。しるゝまは女なども
さふらはざりかりうとさまらうとなどのまいり
おりふしのるなりかれば。おしとこどもぞこゝ須乃
とまゝりけり。（内丞）ぐ人むかへまゝりとさく人はれ
なんおぼろけまはあらじとさめく。（須）れてうゝ川。
れかゆなどしるゝまいり。日たかうねおさまひて
人（須詞）なくてあしかあるとさるべき人ぐゆふつけて

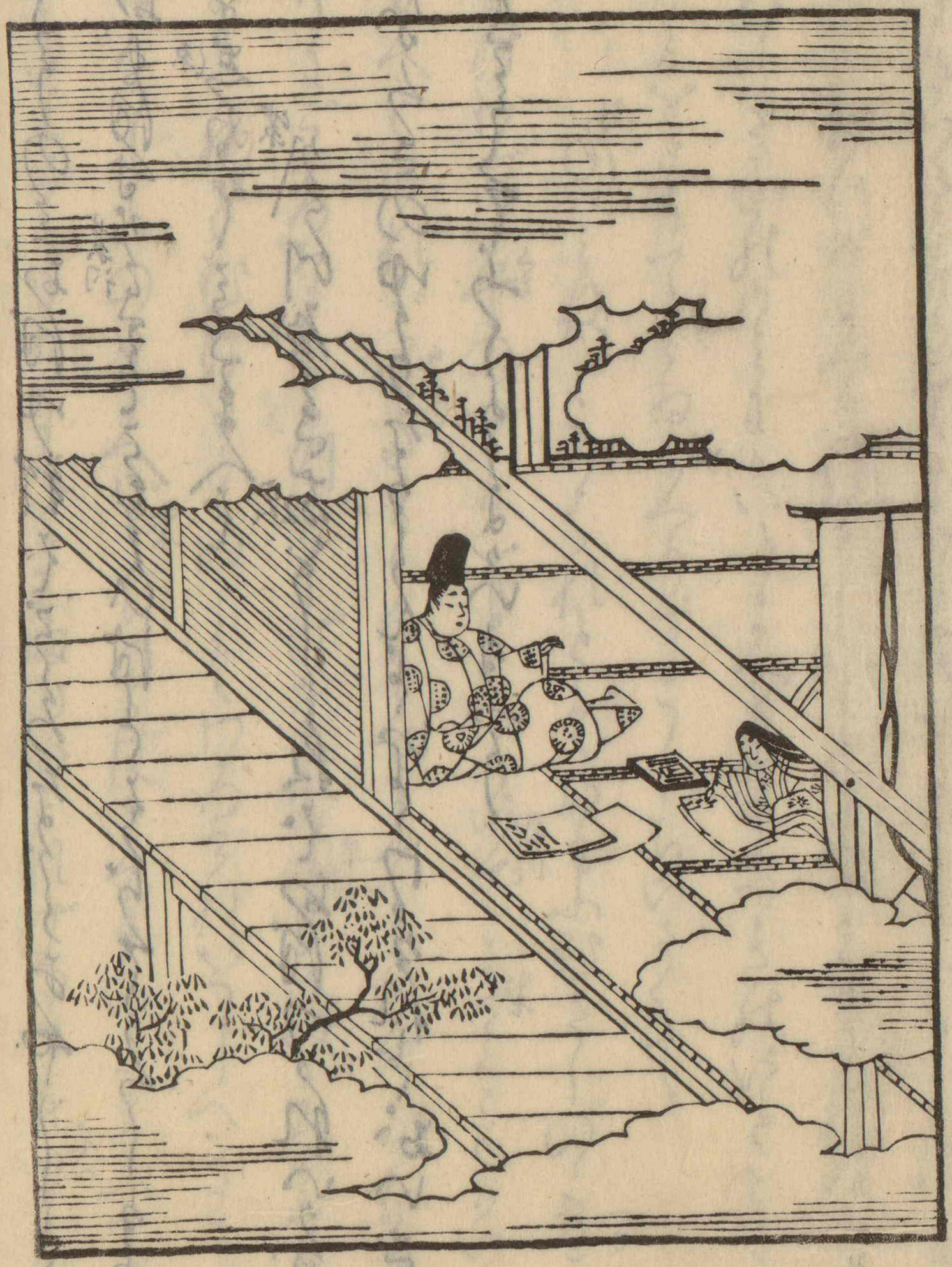
こそはむかんさせ給ものとの給て。毎いまはしまべ
めしまつるすちいさきさかざりこしさしまいれ
とありけれど。いとおかしげまて四人(よち)まいりたり。
紫(紫)ハ此ぞまましくれてゆしのへるをおめ(係)するれ
うして。(詞)かうこころうくかおもせそ。すごろなりひと
もかうもありなんや。女ハ心やもしかるなんよさ
など。今(いま)よりとしへ四人(さこ)給(こまふ)。此かるちはさしもなれて
こしよりも。いうじうきよりまて。なりけりうちち
かうひつ。おりしき絵(ゑ)あそびもの共(ども)とりは此か
りてこせしてまつり。此(こ)こころまつくべきことども
としのふやうしく。(紫)おきゐてこ給りまび。(いろ)殺乃

こ海やかなすがうちなへしろ飛(とも)をこそてなすまごろ
なくうち恵をなどしてお給へるがいとうけて
きまわれ(源)もうち恵まれてこまふひんがしのこいま
わたりまへるまま立(紫)出てまはの末(こ)ごろ池(いけ)のこなど
のぞきこまへば志もがれのお栽(せんざい)恵まかけりやうま
おもしろくてみもしらぬ四位(ぬ)又位(ぬ)こきまぎまひま
なういでいりつゝげまおりしき取(とろ)かるとお消息
此屏風(びやうぶ)どもなどいとおりしき恵をこつるぐさあ
ておはするもしろるしや。志(源)は二三日内(うち)へもまいるも
あまでこれひと波なつけるしひきて給。やうて
ほんまもとおぼすまやてなしひ恵なすぐさ海ぐま

うきつゝこをこそてまつり給いこじうおかしげる
うきあれめのまへりむさし野のといへばかこれぬと
むしさきれかこまかいこまへるすこつきれいとこと
なるをとりてこゝねのまへりすこしちいさくて
源 ひいこねどあくれとぞおもふむさしの宿
日けわぶる草のゆりをとありいで 紫 こゝこゝもかい
のへとなれだ 紫詞 ぞこよりはかぶとてこゝなげ 寒 なかが
なまごろなくこれくしげなれば 源 うらほゝ思こて
詞 よかしねどむげなかくぬこそわろかれをしへこゝ
えんかしとのこまへば 紫 ぞちゝばこそていこまふて
つきふぞとりのへるさ海のおされげるかもら 源 ん

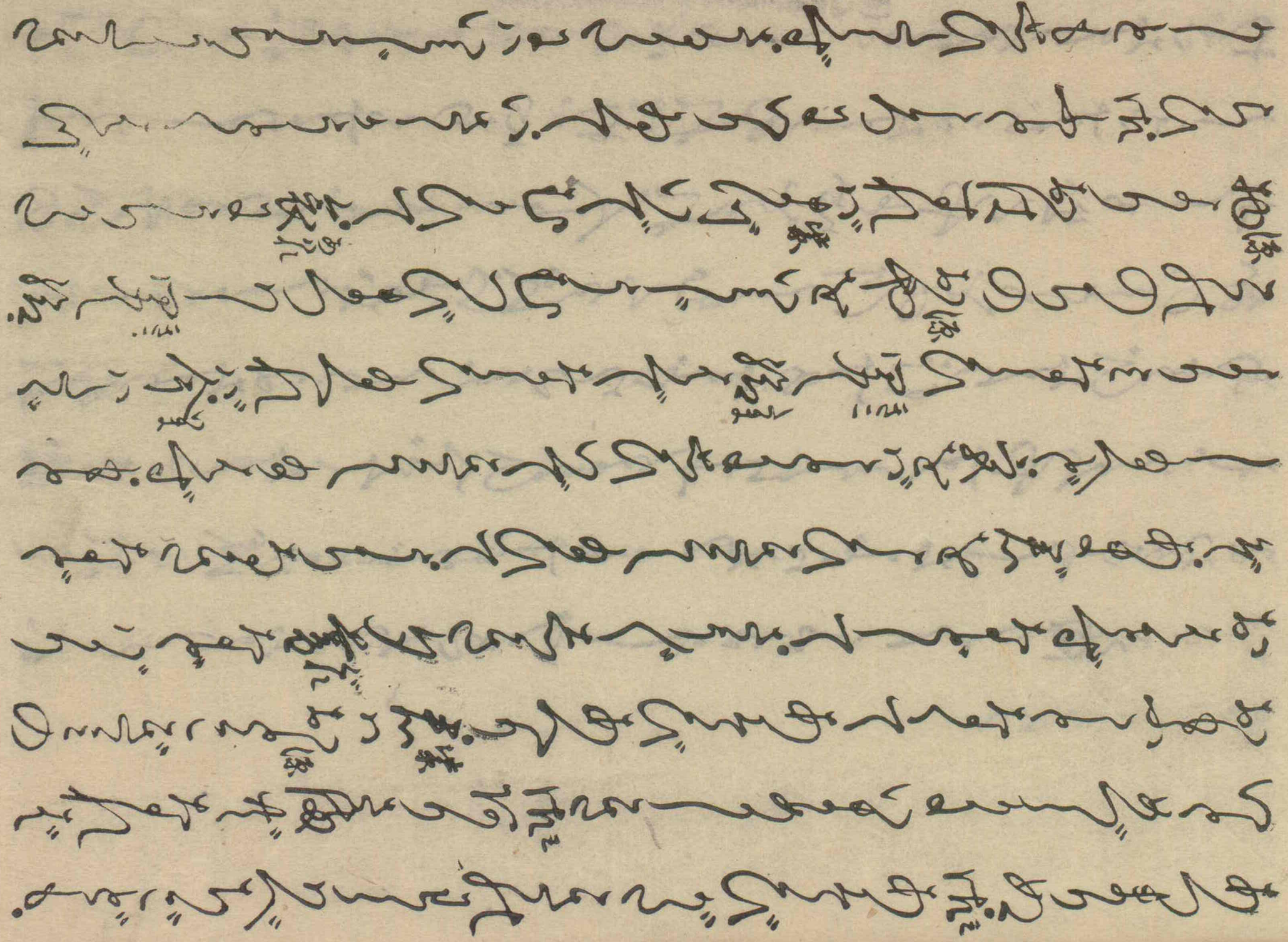


しうのこおぼゆ秋だ。ごろなぐらあやしと
おもほす。紫訂うきそこなひはともだちてうしまふ
と。志源ゆてこゝまへだ
紫かゝ川ぶきあ也をしれだおぼつれいな
なくさのゆりなるんどいとけられどおいさ
ましてふくよりまいまつり



（源ハ）こあまごみまぞまたりけり。いまめりしきるまれ（て）
なりたるぐいとりかいこまひてんとこゝまふ
ひゐゐゝど。わざと。やどもつゝりつゞけて。もろ（と）
まあそびつゝこゝまなきもれおもひのまぎらハ
しなりかれ（紫ノ皇ノ人々）ともまゐしへぐ。（兵ア）又わたり給て
こゞ。こゝろ給けるまゝ。こゝろしやらんかたなく
てぞまびあへりけり。しぐし人まさせじと。
（源）君ものまひか（せうなごん）納言もせふことなれば。きちまくち
がゝめやりつゝこゝゆく思もしらず。か納言がゐて
かくしきこゝろとのこゝろしさすりま。（兵ア）こやも
いふかひなうおほしてこゝのまぎもかしこまはたり

給ふんことをいとも此しとおぼしたりしこと
なれば此のいとさしすぐしたる心ばせ乃あ
まりおいらかなるさんをびんなしなどはいはで
心はまりをてゐてはふかしつゝなありとなく
なくかゝりゐぬ。もしきこいでしそまつらばつげ
よとの給もまづらりしく。僧都の此詠にもしらず。
きこしゐへどあとはかゝるくてあらしりし
此かゝちなどしひしくれしとおぼす。共アルノ きこのる
もはくぞこをまつしとせひ冥あけり心もうきて
わが心はまりせはべうおもほしけるはしらがひ
ぬるばぐちおしうおぼしたりやうく人まいり



わざなりなり。さうしら心ありなまくれとむ川か
しさすぢなりぬれば。わが心ちもすこしぶふ
ふしも出くやと心をかれ。人もうしとぶちまゑひの
外のことも。そのげかし出くる後。いとおかしきもて
あそびなり。むすめなどいるゝがりまなりぬれ
ば。こゝろやすくうちあるまゝひ。べでてなきさ海
まおきふしなどいえしもすまじき後。これも
いとさ海かなりしるかしづきくさなりとお
ぼいるめり

ほん紫をあそびがきとまゐふをゑ

67038
6AP78